

“4、「門田瑞穂日記」によれば、警防団と警察との間には摩擦があった。結局は警察が折れているが、軍と内務省との対立に連なるものであろう。

“5、食料増産を課せられた春野地方には、満洲集団移民のような不幸な冒険はなかった。幸運であった。

“6、岡崎精郎先生之碑(全文)

あなたはりっぱな詩や絵をかかれ、すぐれた芸術家であった、

あなたは同和問題に力をつくされ、偉大な社会教育家であった、

あなたは農民運動に生涯を捧げられ、農民の父としてしたわれた。

衆議院副議長 杉山元次郎書

高知県農民建之

昭和三十三年五月

(秋山・種間寺境内)

“7、昭和八年(一九三三)米穀統制法、同十四年(一九三九)米穀配給統制法施行、

“8、大正十三年(一九二四)小作調停法、昭和十三年(一九三八)農地調整法施行。

“9、「土陽新聞」昭和三年(一九二八)六月四日に、四十五万円の半額国庫補助とある。

“10、その他秋山村、諸木村等でも戦事中同様に行なわれた。

“11、大正期から筏は用水路の側壁を壊すと苦情が大であった「門田益穂日記」。

“12、弘岡産業組合はトラックを購入使用した「安並家文書」、また海岸線の県道仁西―長浜線は昭和八年(一九三三)起

工同十一年(一九三六)完工した。

“13、弘岡上ノ村長安並馬吉、同中ノ村長吉良俊好、同下ノ村長前田秀美、

“14、弘岡上ノ村「村会議事録」昭和四年(一九二九)、

“15、春野地方の東部と西部には、弘岡井筋の上と下との歴史的な地域差がある。

“16、最近県から産業功労者として表彰された。

“17、農会は大正十一年(一九二二)の新農会法制定以後、昭和期に入って活力を回復した観がある。系統農会の政治力も

あろう。

“18、干(千切)大根を、宮崎県より紹介開始したのは、弘岡上中島鉄馬(一八六二―一九四四)であった。

“19、昭和四年(一九二九)十一月底引き網に反対した高知県下の漁民騒動にも参加した。

“20、日華事変こそ日本を最悪の事態に追い込んだものである。

“21、「高知県史近代編」によれば、昭和十八年(一九四三)七月高知県知事高橋三郎も南学精神を強調している。

“22、弘岡三方村は共同して国民学校として運営する、弘岡上ノ村「村会議事録」。

現代編

昭和後期の春野

地方自治の復興と発展―春野村(町)合併

地方自治の復興、多くの傷痕を残して戦いは終わった。戦場から戦災の都市から人びとは帰る。

梅咲きて戦禍の民の帰りけり

竹崎 薫

帰郷する人たちを迎えた郷土を守った人たちは、改めて幸運に感謝しながら、たがいに立ち上る。戦いに子や夫を親を失なった人たちも、これに伍して苦しい生活を生き抜く。戦争の不安は去ったが、生活の戦いは長く厳しく待ち構えていた。ことに終戦の年九月の枕崎台風の被害は甚大で、「朝見ると遅稲の穂は真白」「門田瑞穂日記」となっていた。同日記同年十二月十九日には、

門田昌明氏に頼んで遅稲を抜いて貰う。潮風が吹いた為に、五反抜いた籾が米にして三俵位しか無い。忝反歩で二斗位の米まったく惨胆たる大凶作である。しかも全国的にも餓死者多数と推定され、激しく上より食料―米、麦、甘藷、馬鈴薯の供出が迫られる。実際戦後の食料難は、今想い出すもおぞましいものであるが、これは非生産者に限らず生産者農民にも重い負担であった。「高知新聞」昭和二十年(一九四五)十二月十二日には、吾川郡食糧対策協議会が供出米に苦心したとあるが、その衝に当たった地方事務所、村役場の関係者も苦心したことである。幸いに供米完遂として農民の協力が得られ、食糧危機が突破できたことは、日本の再建のために何よりであったと思われる。さて、終戦ではあるがもちろん敗戦であり、いわゆる無条件降伏である。「ポツダム宣言」の条項に従って、占領軍の監視下に民主化が進む。高知県へも昭和二十年(一九四五)十月十八日には連合軍が上陸する。この月

はまた、五大改革といわれる民主化の方針が示されたが、ほとんど応接に違もないように指令は下され、旧日本の政治社会は激しく変貌する。そのうちとくに農村にとって重要な意義を持つものは、まず農地改革である。古くは、大正末期自作農創設の動き、また戦争中の、適正小作料調査と自主的な努力はあったが、終戦の年十二月九日、ついで翌昭和二十一年（一九四六）十月二十一日と、第一次、第二次農地改革は指令され、ほとんど想像もされないような大変革が行なわれる。県の農地部、農地課には、かつての小作官経験者が起用され、多くの課員を集めて指導に当る。また地主、自作、小作から選挙された代表によって農地委員会が県、市町村に生まれ、新しい土地制度の成立となる。農地委員会には権威が与えられ、とくに小作代表の意見が通るように、最初から配慮されたものであった。いま「高知新聞」の伝える農地委員の構成を左表に示そう。

	地主代表	自作代表	小作代表
県	三人	二人	五人
市町村	六〇	四〇	一〇〇

当初地主は適正小作料にも反対、また土地取り上げも行なう等強硬であり、また小作側も、たとえばかつての岡崎精郎の伝統を持つ秋山村では、藤崎義明氏（一九〇九—）を中心にして農民組合として結集し、地主保有地の制限、小作料の大巾引き下げ等を要求したが、結局は占領軍の強い指導もあり、不在（非在村）地主の全所有地と、在村地主所有地七反を除いた、全小作地は強制的に国に買い上げられ、改めて小作に売り渡される。また七反の在村地主所有地も、小作権が認められたうえ、小作料はきわめて低廉な金納小作料となった。昭和二十二年（一九四七）十一月二十七日の「高知新聞」には、前日の農地改革促進県民大会の状況を伝え、自作農の喜びを

「永年渴望の、自分の手で自らの土地を耕す念願のかんた喜びであふれていた」とする。さもありなんである。かつて岡崎精郎は、高知県会で質問し農民の窮乏貧困の「根本原因は、土地の取り上げの不安と法外に高率なる小作料の搾取にある」とし、「此の高率小作料を合理的に引き下げ、且つ小作農民の小作権を擁護」しなければならぬとしたが「昭和十一年高知通常県会議事速記録」、いまや敗戦を機に、一躍して小作農は自作農となる。日本の長い歴史にもまったくないことである。

ところで農地改革進行中は、小作農を中心に農村に革新の動きが活発であった。岡崎精郎の指導を受け、昭和六年（一九三二）十二月の、吾南の小作争議に勇名をはせた広島県出身原上権次郎（一九二二—不明）は、この時点—昭和二十二年（一九四七）四月の参議院議員選挙に、日本農民組合刷新連盟を名乗って立候補約三万八千票をえ、また同月の衆議院選挙には、その妻であった原上ツル子氏（一九一四—）は、約二万八千票をえて次点落選となっている。しかも土地をえた農民が保守的になるのは世界の歴史に共通のことであって、この時点を限りに、農村は急速に保守安定の政治風土に移行する。それにしても農地改革は悲劇であった。先祖伝来持ち伝えたもの、あるいは本人の知恵才覚、努力によってえたもの、そのいずれを問わず田地は地主の手を離れていった。時代と観しながらも痛憤を禁じえないものも多く、ことに教育によって新しい地位、職業を持った以外の地主の痛手は甚大であった。思うに働かざるものは食うべからずであり、労働こそという時代の要請であろう。

さて終戦とともに、絶望と責任感とで早くも辞任した村長も出たが、なおその職に止まり戦後の復興に努力したのもあった。そうした戦後の地方自治制を根本的に変革させたのは、昭和二十二年（一九四七）四月十七日の地方自治法の公布である。これは昭和十八年（一九四三）六月実施によってほとんど滅び去った地方自治を復活前進させたもので、首長公選を要に、議会の強化等いわゆる民主化の線に沿うものであった。すでに前年十一

月には、地方公職追放が命ぜられ、戦時中在郷軍人会あるいは大政翼賛会等に関係した者の責任が問われ、村長にはこれに該当する者も多く、これによって村落指導者層はほとんど一変する。独立回復後追放は解除され、多くの人はカムバックするが、この時点での指導者の交代は、またその時点なりに大きな意義を持ち、指導者の若返りともなる。かくて統一地方選挙は、昭和二十二年（一八四七）四月に行なわれ、春野地方の各村々では左の人びとが新村長として選出される。

諸木村	高橋楠一	芳原村	吉本勝	西分村	長崎太郎
秋山村	橋本亭	仁西村	田村勢郎	弘岡下ノ村	宇賀延宜
弘岡中ノ村	井沢健彦	弘岡上ノ村	中島精一郎	森山村	山崎幸馬

当時の選挙は、すでに昭和二十年（一九四五）十二月、婦人参政権が与えられていたこともあって、多くの人びとに明るい未来を思わせたものである。

以後昭和三十一年（一九五五）九月三十日、吾南各村が大同団結して春野村となるまでの約十年間には、厳しい試練が村々に加えられたものである。まず前述農村に課せられた食糧供出がある。この割当では難問中の難問であって、そのため悶着は絶えなかったが、さしもの食糧難も、昭和二十五年（一九五〇）にはようやく打開され、翌年から主食統制は緩和される。一息ついたわけであって、諸木村長高橋楠一氏（一八九九―）らがこれら戦後処理に苦心したことは今も伝えられる。そのほか村政にも問題はあった。公選首長と議会の対立であって、従来村長は村会議員より選挙されたので、自然両者間には直接的なつながりがあった。新自治制ではその点当初両者意志の疎通を欠く。しかしながらこれは新しい体制に不慣れのためであった。両者の互譲によってやがて円満が

図られる。

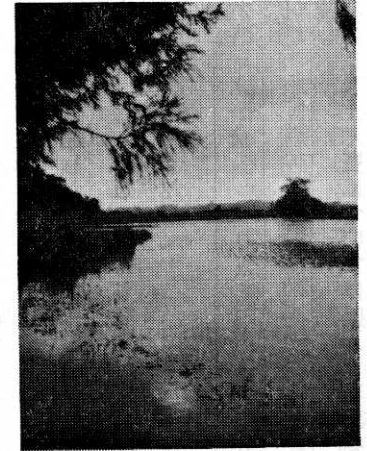
ところで戦時中よりほとんど倍増した職員の多くは、新しい村落施政に吸収され、さらに部分的には増員される。すなわち村長直属の職員のほかに、議会関係、選挙管理委員会関係、農業委員会関係等である。これら多くの人たちは、戦前戦中と伝統的な低い給料で働いたが、新しい村ではその待遇は国家公務員に準ずることになる。これはまことに当然であって、もはや役場は地主の奉仕的な仕事場ではなくなった。住民のいわゆる公僕として、また職員組合として身分を保証され、力を発揮する場である。それにしても財源の弱体であるのは、地方自治体の伝統であった。地方税法が改められ、住民税、固定資産税といわゆる自主財源は与えられが、その額は総予算からみて決して豊かでない。「春野町役場所蔵史料」から左表をえた。

村名	年次	歳入総額	内村税分	比率
弘岡中ノ村	昭二九	一七、六六四、一三四円	二、七二三、一五〇円	一五%
仁西村	昭三〇	一九、四四五、五〇四円	三、一三三、六〇〇円	一六%

まことに共通した特徴を示し、税収は歳入のわずかに十五パーセントにすぎない。世にいう三割自治とはこれである。しかもこの期にも暴風洪水はけっして少なくなかったため、災害復旧には多くの苦心が払われた。同史料所収昭和二十九年（一九五四）仁西村での追加更正予算をまとめて表示すれば、

歳入	土木費	内災害土木費
三七、一八八、三九五円	二五、八〇九、六〇〇円	二四、八三六、一〇〇円

右の災害土木費については県より半額を超える約一千四百万円の補助があったが、なお村債約一千五百七十万円



洪水台風キジア
(昭25・9上堤岡弘)

を要している。仁淀川を国家管理への叫びは、まったく自然であろう。なおこれらの点後述する。

「高知新聞」によれば、昭和二十五年(一九五〇)弘岡上ノ村村長中島精一郎は、村政の方針を農業経営の合理化、農道整備のほか公民館活動、保育園の整備においている。いわゆる行政水準の向上は新しい村政の方向である。弘岡上ノ村に村立保育園が工費百三十五万円で設立されたのは、昭和二十六年(一九五二)七月で、また森山村が村内五カ所にマイクを設けて弘報活動をさかんにしたのは、同年六月であった。少しおかれて昭和二十八年(一九五三)には、高岡町(土佐市)に高吾伝染病院が設立される。占領軍の指導、あるいはいわゆる抗性物質による新業登場により伝染病は急速に減少、とくにストレプトマイシン等により結核に対する恐怖は激減する。

さて春野町役場所蔵史料に、昭和二十九年(一九五四)の弘岡中ノ村支出予算書がある。うち

社会労働費	内失業対策事業費	内国庫支出金
九、六〇六、九三二円	七、九三三、四四二円	三、九四二、四三〇円

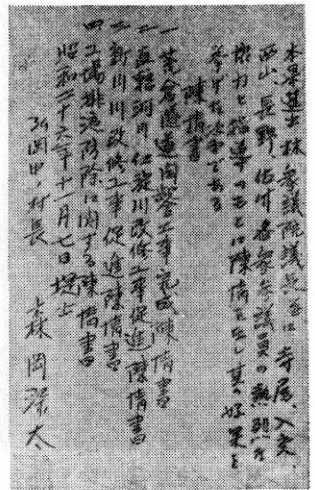
右は前田^{みなかみ}浩氏によれば、当初昭和二十八年(一九五三)、弘岡中ノ村村長森岡深太氏(社会福祉功労者として表彰)首唱により、弘岡中、下、森山、仁西四カ村共同による田辺一木ノ瀬間(西畑延長計画)の道路建設を目的に起した失業対策事業が発端で、その資金を国庫支出に求めつつ、失業者に仕事と賃金を与えるものであった。かつて

昭和七年(一九三二)救農国会による土木事業の伝統を持ち、現在も失業対策事業として春野町に引き継がれる。住民福祉から考えてきわめて重要な意義を持つものと云えよう。しかしながらこうした洪水との戦いも保育園、公民館の設置も、また学校の改築、あるいは失業対策事業ももっと広域の協力によらねばならない。いまや吾南九カ村の合併は、歴史の必然としてその日程に上ってくる。

春野村の成立 吾南九カ村が一種の運命共同体として、長い歴史を綴ってきたのはすでに縷々述べてきた。思えば仁淀川の水防、弘岡井筋の水利を中心に、村々は互いに別れてはいたが、事あるごとに団結は強められてきた。とくに戦後の新しい地方自治制のもと、一層の前進を図るには、全域の団結を前提としなければならない。すでに昭和三年(一九二八)弘岡三カ村と森山村合併の計画があった。弘岡中ノ村「村会議事録」によれば、村長、村議会議長からなる吾南開発協力会の代表は、ついに昭和二十六年(一九五二)十月全国町村長会議の際を利用し、県出身の衆、参両院議員の協力、指導により、政府に左の諸項目の実現を陳情する。

- 一、荒倉トンネル完成
- 二、仁淀川改修促進
- 三、新川川改修促進
- 四、工場廃液防除

右の諸問題には、今日もなお解決していないものもあるが、いずれも吾南地区全体に喫緊の諸問題であった。こうした問題解決には、吾南開発協力会を超えるより強い団結が必要であったはずである。さていつの歴史でも、地方の歴史には多くは上からの指導推進が働く。町村合併の発端は、実にシャープ勧告による税制の改革である。これに伴って地方行政調査委員会が生まれ、市町村を地方自治の中心として強化する方針が打ち出さ



「弘岡中ノ村村議会議事録」
(春野町役場蔵)

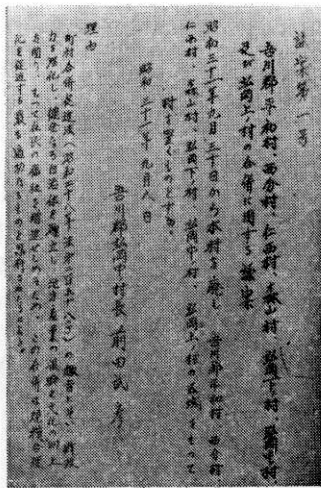
れ、市町村のいわゆる統廃合が問題となる。昭和二十五年（一九五〇）来のことである。しかしながらすでに百年に近い村の歴史が、簡単に変えられるものではない。住民の生活に密着した伝統となっているからである。昭和二十六年（一九五二）一月一日の「高知新聞」の広告には、県の地方自治に理解を求めるいわば広報文が出ているが、このあたりから、県の行政指導として合併が進められたものである。当時なお、戦争期の名残りの地方事務所が活動したが、町村合併推進はその最後の土産となる。同新聞の同年六月二十八日には、県政に対する吾川郡の要望として、財政確立のため町村合併推進の記事がある。ようやく潮満ちくる感じであるが、なお容易ではない。翌二十七年（一九五二）十二月二十日の同紙には、当時の仁西村長前田渚氏（一九〇〇）は、水防工事等の陳情に明け暮れたこの年を懐顧して、「廊下トンビ」と自嘲している。財政難にあえぐ自治体首長に共通の嘆きであったと思われる。

ついに国は伝家の宝刀を抜く。町村合併促進法の施行である。合併を条件に小、中学校建設、教育文化施設整備、消防設備購入、医療機関新設等に財政援助を約束するのであって、これはまことに財政難に苦しむものには魅力のある処置であった。合併は急速に進められ。昭和二十九年（一九五四）は町村合併の年となる。吾南地方でも九カ村を一つとするか、あるいは東西二村とするか、問題はしだいに煮詰ってくる。県は最初より一村をとの考えを持っていたようであるが、もちろん決定するのは地域住民でなければならぬ。かくて同年二月ついに、吾南開発協力を改めて町村合併促進会を結成して問題に取り組むことになる。ところで同年三月一日、伊

野町が合併第一号として発足したにもかかわらず、なお吾南各村が若干遅れたことには理由がある。

すでに前述したように、近世においても井上、井下と弘岡井筋利用に多少の対立があり、また海南蘭系販売協同組合の成立にも同様の対立があった。また合併ともなれば、住民にただちに不便を生じる役場の位置、これは核となる大集落のないことにも関係がある。あるいは長い間営々と積み立ててきた村有財産の処分問題、これは逆に負債を背負わされる問題等容易に決めがたい点であるが、そのほか吾南地方が、距離的にも、経済的、文化的にも高知市に近く、その影響を強く受けたうえ、隣村長浜村がすでに戦時中高知市に合併されたこともあり、むしろこの際高知市に合併を考えたことも見通されないところである。これが不調となつていよいよ合併問題は本格的となる。ついに一先ず九カ村一村へを断念、まず東部の諸木、芳原、秋山三カ村が、諸木村協議会議長尾仲貞美（一九〇一—七〇）らの熱心な推進により、平和村として出発する。「高知新聞」の伝えるところでは、昭和二十九年（一九五四）四月二十三日、以上三カ村それぞれに村議会を開いて合併を決議、地方事務所をへて県知事に申請する。申請は同月二十七日の臨時県議会で承認され、六月一日発足となる。村名平和は、戦後日本の進むべき方向の平和国家にあやかるものである。村長にはやがて池上藤馬（一八九八—一九六九）が選挙される。戸数千三百六十二、人口六千六百六十二人の大村はかくて生まれ、立村の目標は農漁業を中心におかれ、具体的には河川改修、砂防堤建設、水害、潮害防止、農家振興、道路整備、文化向上、工場誘致が掲げられる。また平和村協議議員も選出され、議長に小島勝正（一九一六—六五）が選出される。同氏はさらに春野村合併の積極的推進者でもあった。

昭和後期の春野
残された六カ村が別に一カ村を作ることなく、後にこの平和村と合併したのは賢明であったが、その交渉は相
当に難航し、この種の問題がいかに困難であるかを示している。「高知新聞」の伝えるところでは、同年八月三



「弘岡中ノ村村議会議事録」
(春野町役場蔵)

このいわば大義名分が多く、困難を克服させたものであり、また歴史の風雪に堪えて、今後も長く伝えられるべき立村(町)の精神であろう。

また同じ史料には、「春野村建設計画書」があり、「新町村建設の基本方針」が右にあげた「合併を必要とした理由」

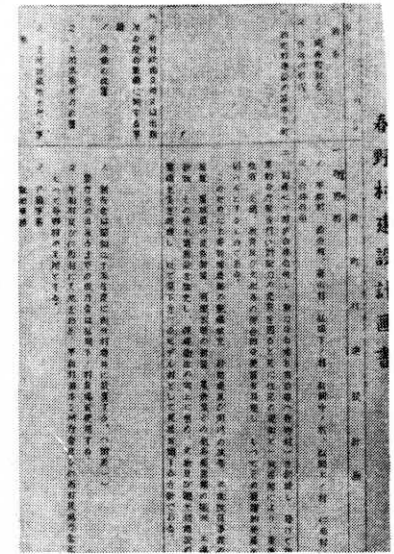
難航に難航を重ねたことがわかる。仮庁舎は弘岡下ノ村役場に、新庁舎は西分増井と決定され、人口約一万七千人、面積四十五平方キロメートルの新村は、九月三十日発足となる。村名春野は公募した結果であるが、語義の生物化育と、また野中兼山由縁の春野神社に由来し、吾南地方を團結する新村の名称としてはまことに相応しく、小島祐馬博士もわざわざ意見書を提出して、その採択を勧めたものである。難産の結果ようやく生まれたとは言えるが、この間衝に当たった人びとの辛棒強い交渉は、高く評価されるべきであって、重大な事業には時間をかけた調査、説得が必要である。

同 十一日	高知市で第六回協議会、協議書決定。
同 十二日	各村議會了承の決議成立。

日六カ村での合併と定め、その月二十八日弘岡下ノ村役場での協議で、ほとんど決定を見たが、十一月六日同所で開かれた合併協議会は、まったく暗礁に乗り上げる。原因は財政問題にあったとあるが、この日から交渉はまったく中断—無期限休止となる。前述村債と村有財産が問題となったものである。その後約半年の休止の間にも、内外より合併への努力が試みられたことであろう。翌三十年(一九五五)六月九日、吾南開発協力会は森山村で総会を開き、吾南地区に青果市場設置を協議した時、改めて平和村を含めて吾南七カ村合併が協議される。しかも前述の問題でなお結着を付けることができず、その年は暮れた。

いよいよ合併成功の年昭和三十一年(一九五六)は明けた。春野町役場所蔵「春野村設置申請書」によれば、合併問題解決の大詰め動きは、左表のとおりである。

月 日	要 摘
七月 九日	代表四十八名(各村六名、平和村十二名)弘岡下ノ村役場集合、吾南七カ村合併促進協議会組織、
同 二十三日	右同所に第二回協議会開会、庁舎位置、財産処分意見不一致、再調査となる。
同 三十日	右同所で第三回協議会開会、庁舎の位置依然難航、流会となる。その後県の説得が反対の村に行なわれる。
九月 三日	右同所で第四回協議会、決せず、
同 六日	右同所で第五回協議会、ついに庁舎位置決定合併へ。



「春野村建設計画書」
(春野町役場蔵)

をさらに布^か行し、強力なる地方自治体の創設、効果的
行政実施、住民の団結、産業文化の飛躍的發展を期
し、具体的には、

- 主要幹線道路の整備拡充、砂防堤及び河川の改修、土地改良事業の推進、農林道の改良新設、有線放送の新設、農産業その他各種産業の振興、工場誘致、その他水道施設を拡充し、保健衛生の向上に努め、文教及び観光諸施設の整備充実を促進し、以て県下第一のモデル村として發展を期する方針である。

まったく意気天を衝くの気概とはこれである。個々の目標は時代とともに変化しようが、野中兼山に由縁の村(町)名とともに、県下第一のモデル村―土佐―高知県のデนม―は、また永く誇りをもって伝えられるべきであろう。かくて新村長には前弘岡上ノ村々長中島精一郎(一九一八―七二)が選出され、また同年十一月七日には、旧村別選挙区で新村議二十六名が選出される。旧村職員もすべて新村職員に引き継がれて身分は保証され、新村の運営に改めて努力することとなる。

合併後の発展 合併後二十年間の春野村の発展を、村長(町長)ならびに議会議長の一覧表として左表に示した。

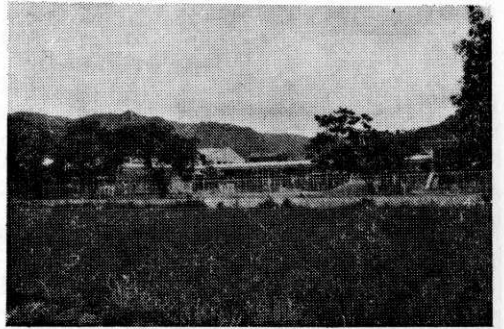
中島村長の時期は合併当初であり、前述「春野村建設計画書」に基づき、新村の基盤を固めていったが、この期における春野村の動きには、いくつかの問題があった。まず昭和二十八年(一九五三)より進められた愛媛県への仁淀分水である。詳細は後述するが、また難航に難航を重ねた上、愛媛、高知両県にわたる大開発計画が合

年 代	村(町)長	村(町)議会 議長
昭和31	中島精一郎	西村仲道
32		
33	横田百喜	川島速男
34		
35	桑名健吉	森岡深太
36		
37	中山昭	吉本 勝
38		
39	長崎胤喜	前田 秀雄
40		
41	川崎 宗行	雨森 広志
42		
43	中山昭	川崎 宗行
44		
45	川崎 宗行	雨森 広志
46		
47	川崎 宗行	雨森 広志
48		
49	川崎 宗行	雨森 広志
50		

併の年ついにまとまり、同年十一月決定となる。八田堰の大改修と弘岡井筋幹線約二十キロメートルの完全コンクリート化である。国、県の莫大な補助―投資が行なわれ、昭和三十三年(一九五八)着工となる「高知新聞」。その成果については、すべての人びとが周知するところである。

また昭和三十二年(一九五七)九月には、人びとに親しまれた有線放送が登場する。常時五、六名のいわゆる交換嬢は、電話機兼用のスピーカーで「モシモシ」と呼びかける。これがやがて電話の普及と自動化に連なる。これと関連して考えられるのは、翌三十三年(一九五八)四月の春野村中央公民館落成である。もとより現在のものではないが、公民館活動は当時非常に推進され、村の文化―社会教育の中心として人びとの期待に答える。公民館といえばその前年の昭和三十三年(一九五七)七月十八日に、弘岡中の南部に隣保館が落成する。工費約六百五十万円、二階建瓦葺、二階は講堂、一階は事務室、医療室、畳の間の会議室兼洋裁室、炊事場等当時としては人を驚かす堂々たるものであった。多くの人びとの努力によって生まれたものであって、同和問題の大きな前進である。

また戦後働く人びととくに勤労女性の要望に答え、農村にも保育園が設置されたが、これは旧村時代からの実り豊かな新しい地方自治の現われであった。この期にも新村下いよいよ前進して、「高知新聞」昭和三十三年(一九五八)四月には、村内に弘岡上、同中、同下、森山、仁ノ、西畑、秋山、戸原、諸木、内谷、西分、芳原と活



園育保中岡弘

動している。

しかしながら、この年三月五日の弘岡中、南部の大火は、前古未曾有のものであった。幕末期仁ノ村で、また明治末期新川でと大火はけっして少なくはないが、この日の大火に及ぶものではない。折悪しく断水中であったうえ、道中はせまく消火活動は思うにまかせず、ついに百戸に近い焼失家屋と三百人に近い罹災者を出す。村当局はただちに対策本部を隣保館に設け、被災者を隣保館に収容、また災害救助法の適用を申請する。不幸な事件であったが、人びとの努力と協力によって区画整理と新住宅が建設され、見事な復興を見る。これを機に消防設備も強化され、ついに現在見事な消防所が仁淀消防組合春野分署として、弘岡下に設置される。なおこの年九月一日また健康保険制度が実施され、病氣の人びとの不安を軽くする。

教育関係では昭和三十三年（一九五七）と平和中学校が建設されたが、当時教育界は勤評問題で沸騰する。教育長上田茂穂氏（一八九八）がその衝に当たったものである。詳細は後述する。

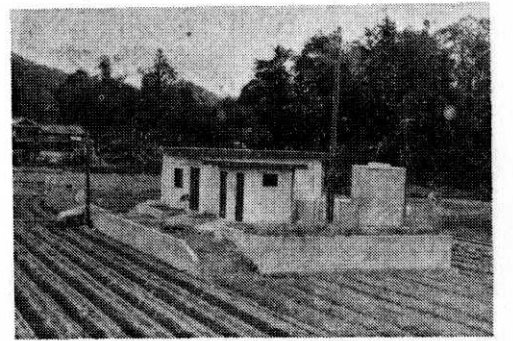
中島村長は、昭和三十四年（一九五九）四月の県議選に出馬のため辞職したので、五月改めて村長選があり、諸木出身、中国引き揚げで革新を標榜した横田百喜氏（一九二一）が当選する。五月三日の「高知新聞」には、保守色の強い春野村で革新系の当選を、青年層、教員の支持と分析する。

横田村長の施政も、合併後の村政の方向「春野村建設計画書」の線上にあるが、村の融和団結はようやく進み、まず昭和三十五年（一九六〇）十一月には、旧村区域を選挙区とする村議選を今回限りとし、次回より全村一区

となり、昭和三十九年（一九六四）選挙には大妻田鶴子氏（一九〇二）が、また昭和四十年（一九六五）三井幹氏（一九〇〇）が女性議員に当選する。なお全村一区に対応するのは新庁舎落成である。早くも昭和三十七年（一九六二）九月七日には、移転完了仕事初めとなる。昭和三十五年（一九六〇）着工、工費約二千万円、二カ年計画で鉄筋二階建九百平方メートルの堂々たる近代建築は、ほとんど忽然として人家疎らの場所に生まれる。地理的にはまさに村の中央である。伝統に捉われることのない点、新村の庁舎位置としてたしかに適当であろう。世は自動車交通の時代でもある。しかしながら、新庁舎建設着手の前年七月一日には、春野村の赤字約六千万円、政府の地方財政再建促進特別措置法の「準用団体」指定を受けることになっている。町村財政とくに合併後の財政状態はこの町村でも切迫している。合併のいわば公約履行を迫られるからでもある。

横田村長の施政期は、国では池田内閣の所得倍増—経済成長政策推進期であったが、昭和三十八年（一九六三）四月再選されて二期目となった横田村長は、再任の抱負として土佐—高知県のデンマークにふさわしい農村作り—山林果樹園と施設園芸—を進め、高知市の発展とも同調して開発を図るにであった。保革を超えた時代の要請といえるのであろう。昭和三十九年（一九六四）三月、新装の八田堰はほぼ完工、取水開始となり、翌々年の昭和四十一年（一九六六）一月には、待つこと久しき仁淀川一級河川編入が内定する。仁淀川水害予防組合の苦心も昔語りとなり、水防はほとんどすべて建設省高知工事事務所の所管である。しかしながら、これによって祖先の水との戦いを忘れてよいことはない。ついで翌年一月には、学校統合第一次として春野東小学校が落成する。また同年十月には、仁淀川下流し尿処理場が土佐市に完工する。農村にもし尿は廃棄物となった。戦後二十年の社会—衛生の向上である。ついで有線放送は自動化され、さらに便利となる。

横田村長も県議選に出馬、昭和四十二年（一九六七）三月十日の村長選で諸木出身桑名健吉氏（一九一四）が



春野町水道水源地（弘岡上）

当選する。同氏は県職員を歴任、保守系として立候補したが、その抱負は農業立村を基本としながら、農業構造改善事業による開発の推進にあった「高知新聞」。当時農村は経済繁栄のなかで苦悶を開始する。人口流出と兼業増加である。農業基本法の示す構造改善は進まない。経営規模の拡大による労働生産性の増大―自立農家育成策は破綻する。春野村とても時代の制約がある。昭和四十二年（一九六七）以後、春野村では県の指定を受けて集落補強事業を各地区で肌目細かに実施、また同年一億八千万円で構造改善事業を開始、あるいは上水道設備の拡大等、いずれも農村への挺子入れとなるものであった。

さて昭和四十四年（一九六九）三月、町制施行が村議会に提案され、ついに同年九月三十日町制施行―春野町となる。町政の方向は合併十二年、多少の変化を起こしたのであって、町らしく新川、増井等中心に商工会を育成、第二、第三次産業への傾斜を図る。そのため社会施設の誘致は進められ、県立運動公園が芳原地区に設置となる。さらにこれを高知市に結ぶ大規模農道の建設も昭和四十七年（一九七二）三月より進められる。長い間の懸案の新川川改修も、改めて重要問題として取り組まれ、これの成功による規模園場の建設が図られる。これらはまた地価値上りのなかで、公共用地の先行取得の必要となり、いわゆる開発財団が設置される。昭和四十五年（一九七〇）二月十五日再選された桑名町長は、時代の流れに沿って開発を進め、都市近郊型複合農村への道を辿るのであった。昭和四十六年（一九七一）八月立案された高知広域都計では春野町は市街化調整区域として組み入れられる。弘岡上に昭和五十年（一九七五）四月落成の特別養護老人ホーム

ム春野荘、また現在工事進行中の弘岡下の県立若草養護学校も、上記の動きと無関係ではないと思われる。

しかも桑名町長施政期完成をみた最大の事業は、町内中、小学校の統合と新築であろう。すでに前任横田村長の施政期にその方針は打ち出され、春野東小学校は落成していたが、これについて昭和四十二年（一九六七）九月十一日には、春野西小学校も新築落成となる。ついに待望の春野中学校も、昭和四十八年（一九七三）九月三十日には校舎新築となる。詳細は後述するが、学制実施以来百年見事な成果である。

さて戦後同和問題は国民的課題として認識され、政府も昭和四十四年（一九六九）同和対策事業特別措置法を実施する。春野町もただちにこれに応じて昭和四十六年（一九七一）四月初代室長に矢野孝男氏（一九二一）を任じて、町同和对策室を発足させ、現在にいたっている。町の同和行政の姿勢―方針は「長い差別の歴史に終止符を打つ」ことにあり、そのため「同和問題は国民の責務であるという理解と認識を全町民に深める」よう懇える。町同対室の事業としては、左の通りである。

- 一、生活環境の改善
- 二、社会福祉の充実
- 三、産業経済基盤の確立
- 四、教育の充実

こうして行政の手は強力且つ具体的に伸べられていく。明治四年（一八七二）の解放令以来まことに絶えてなかったことである。

これに連携して、同和問題解決を進める隣保館は町民館と名を改めて発足する、弘岡中町民館は、昭和三十二年（一九五七）六月竣工の隣保館―森岡深太氏の働きにより全額国庫負担で建設されたものを改築したもので、鉄

筋二階建延四百五十平方メートル、階下は事務室、相談室、教養娯楽室等に、階上は大集会室、図書室に当てら

れる。初代隣保館長森岡深太氏（一九〇二—）、次で初代町民館長として森岡盛重氏（一九二〇—）につづいて国沢正泰（一九二〇—）氏が館長である。また岡崎精郎の伝統に輝く石丸隣保館も、昭和三十三年（一九五八）四月改築され、岡崎精郎の影響下に解放運動を進めた寺田一氏（一八九七—）が館長を勤めたが、改めて秋山町民館として昭和四十六年（一九七二）開館、館長は森本博氏（一九二一—）と交代する。大小の会議室、調理室、図書室等完備した施設を持って、人びとの期待に答えるとともに、町の熱心な行政姿勢を示すものである。

さて昭和四十九年（一九七四）五月十二日の参議院議員選挙の違反により、春野町議会議員のなかには、多くの司直の摘発を受ける者が出る。町は空前の政治的苦悶に追い込まれる。近代性に脱皮しない保守の弱点が、いわゆる村型選挙にはしなくも露呈したと云われるが、長い間の地方自治の功労も一朝にして泥土に塗られる。有力者の集票能力が、上から誘惑されることから始まるが、有権者にも清潔が求められる。なお昭和五十年（一九七五）四月十三日の県議会議員の選挙にも同様違反を出し、その病根の深さには絶望をさえ抱くむきがある。

さて町議会議員は曲折の後総辞職し、昭和四十九年（一九七四）十一月三日の選挙で、新議員が選ばれたが、この事件等は桑名町政を大きく動揺させ、ついに昭和五十年（一九七五）二月十六日の町長選では、前助役の中山昭氏（一九二九—）が当選する。桑名町長が批判されたのは、日本的には高度成長から安定成長への切り替えであり、大にしては田中内閣から三木内閣への政権の移動に通じよう。新町長は年少気鋭、しかも終戦以来の地方自治のいわばベテランである。合併前にも弘岡下ノ村助役を勤めていた。春野町弘岡下の出身。高度成長を安定成長へといわゆる減速をしなければならぬ。時しも不況の中で地方財政の窮迫化が憂えられている。困難に直面しての擲取りに、多くの期待の寄せられるところであろう。

中山新町長は、左に掲げる施政方針をもつていよいよ問題山積の町政の先頭に立つこととなった。

基本方針

- 一、町行政の信頼の回復
- 二、町民の安心できる公平、民主的政治の実行

具体的施策

- 一、道路、公共施設の整備
- 二、産業基盤、生活環境の整備
- 三、社会福祉及び教育の実質向上
- 四、郷土文化の振興

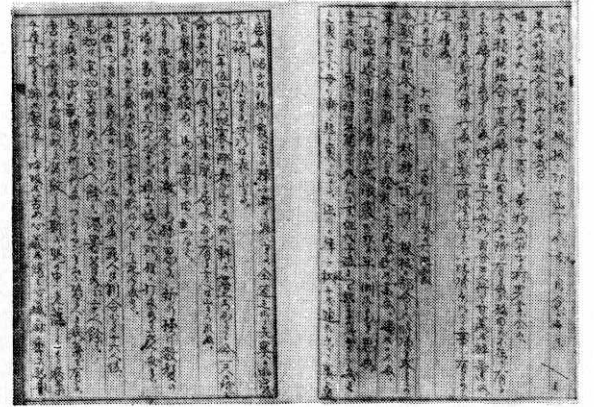
まさに福祉安定型成長路線に相応しいものである。昭和五十一年（一九七六）は、吾南七カ村合併二十周年である。町政に一段の飛躍が期待されるのであろう。

水防、水利

水防 戦争中の国土の荒廃は、とくに仁淀川、新川川の水防、水利関係に顕著であった。戦後はこれにさらに多くの災害が加わり、その荒廃を激化させる。なかでも終戦の翌昭和二十一年（一九四六）十二月二十一日午前四時十五分二十五秒の南海地震は甚大な打撃を与える。「門田瑞穂日記」に、

十二月廿一日 大地震 百年来の大地震

今朝一時起床、妻とともに精糖工場へ行く。機械の都合で六時頃となるこの事である。一先ず家へ帰って二十六日の婚礼の



「門田瑞穂日記」(門田瑞穂氏蔵)

案内状を書いた。縄をのうた。午前四時過と思われる頃突。然。激。震。家が早も倒れるかと思つた。妻を起して裏の硝子戸を開きて外に出す。佐代子泣きつゝ起きるのをかきうだきて裏に出す。母も漸く起きて裏より出る。佐川の輝子昭子を連れ来りて奥に寝て居た。昭子を引き抱えて裏へ出る。輝子漸く裏へ出る。全道之れより先奥の兩戸を突き破して外へ出る。今より百年位前の大地震の際、表より出た所へ軒が墜ちかゝつて、今一尺の所で命を失しなう所であったと言ふ事を聞いて居た。瓦のある方へは出られぬ。皆裏の雞舎へ寝た。馬を追い出して田へつなぐ。今日の地震は関東大震災より激しい様に思う。新川横川散髪夫婦の家が倒れて死んだと、又森山の婦人が門柱に打たれて死んだと、又南部の大黒泰次の息子が弟を救わんとして死んだと。

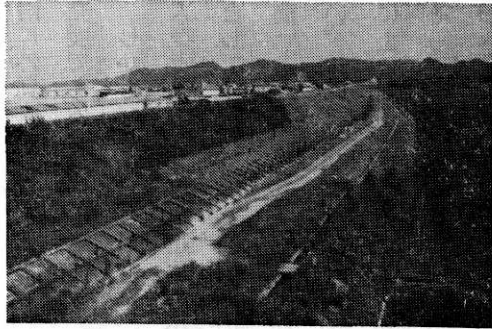
多くの危険箇所が生まれただうえ、仁ノ、甲殿の海岸では約一メートルの地盤沈下が六十町歩の面積で起こる。仁ノでは今もなお完全に復旧してはいない。

「高知新聞」昭和二十二年(一九四七)一月五日には、伊野町民が大会を開いて、仁淀川護岸工事即時実施を要望している。もちろん下流の吾南地方住民も、堤防の危険に対する思いは同じである。二月には伊野町の動きに同調合流して、仁淀川治水対策連合会が結成され、猛烈な勢いで関係上司に運動することになる。高知県ももとのより事態を看過したのではなく、荒廃水田千六百町歩の復旧のため、排水ポンプを設置することになる。この

うちに甲殿二十町歩もはいつている。なお翌三月十四日には、吾南八カ町村長は、県土木部長に仁淀川左岸堤防の早期修理工事を陳情する「高知新聞」。

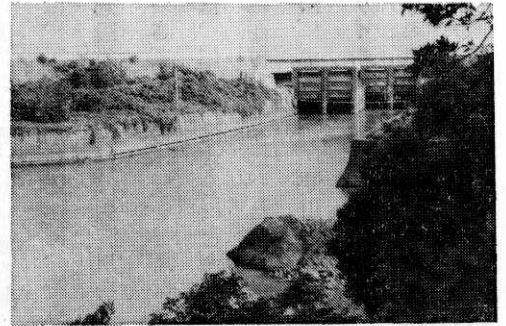
かくて翌昭和二十三年(一九四八)九月、待望久しき仁淀川の国家管理河川編入は達成される。関係町村は伊野町長を会長とする連絡委員会を結成、その要望をまとめて政府に上進する。またこれを期に仁淀川改修期同盟会の結成も進められる。仁淀川のごとき巨大な河川の制馭は、一地方とくに周辺村落の力に叶うものではない。国家が国土保全、民生安定の立場から積極的にその力を作用させるべきであろう。「高知新聞」翌昭和二十四年(一九四九)二月十日には、仁西村が、対岸高岡郡新居村の仁淀川堤防構築が、仁西村側の被害を激化するに抗議しているが、これは明治―大正期と、より上流の右岸高岡町、高石村(土佐市)と左岸弘岡、森山方面との間における堤防構築を廻つての大問題に連なるものであった。すでに前述したが、仁淀川が国家管理となれば、工費支出のほかに、そうした対立に関しても大局的見地より公平な処置がとられるはずである。この年十月建設省治水課長は仁淀川を視察する。

さて多くの不安を与えながらも、明治後期―大正期へと努力を重ねたことによって、行当―森山間の連続長堤は、仁淀川洪水をほとんど昔語りとしたのに対し、戦後なお直接に洪水の被害に苦しまねばならなかったのは、仁西村であった。とくに特殊な「晴天の洪水」は、他の村々では想像もできないことである。台風之余波等の暴浪によって、仁淀川口が閉塞される。空には太陽が燦々と輝く時ここでは田畑の浸水である。まるでエジプトのナイルの氾濫のようである。仁西村では昭和二十六年(一九五一)十一月、西畑すずれの堤防の延長工事を起工するとともに、いわゆる導流堤を建設し、晴天の洪水を克服したのはようやく昭和三十年(一九五五)のことのようであった。なお同村では、昭和二十九年(一九五四)震災による地盤沈下四十町歩の復興のため、ポンプ二台



仁淀川堤防（仁淀川大橋より南方）

望むのは自然である。昭和三十九年（一九六四）以来一級河川への激しい運動は続けられ、ついにその目的は達せられて、昭和四十一年（一九六六）一月内定する。内定とは決定も同様である。今も仁淀川堤上に「一級河川仁淀川」の標示を見るが、これは一つには国家―政府の力を誇示するものであるが、また粘り強い住民の運動の勝利―凱旋門でもある。実に国費負担は工費の四分の三となった。かくて経済成長のなかで計画は拡大強化され、昭和三十九年（一九六四）度までに七億九千万円を投入したのを、さらに同四十年（一九六五）より五カ年間に、十一億円投入となる。従来の堤防とは比較にもならぬ巨大な堤防は、ついに行当―森山間ばかりでなく、実に伊野町より仁西地区西畑南端にまで連なる。海岸のいわゆる黒潮ライン兼用の防潮堤も完成した今日、今や川と海との猛威にも完全に安全といえそうである。これに弘岡上の行当より



甲 殿 港 口

を一千八百万円で設置排水に当たるとともに、地盤の嵩上げを行なう。この間八年に及ぶ村長田村勢郎（一八九七―）、前田清両氏の苦心は記憶されるべきであろう。資金を県費補助、起債に仰ぐための、「廊下トンビ」―陳情の嘆きはここから生まれたものである。なお事情の似た秋山村甲殿にも同じ悩みがあった。震災復興と新川川の滞水処理の問題である。「高知新聞」昭和二十八年（一九五三）四月には、秋山村甲殿に港湾事務所の記事があり、また同年五月には、吾南開発協力が同所で開かれた記事がある。新川川の滞水一掃のため、近世より問題となり、近代以後も関係村々を苦しめた、甲殿港口の合理的な改修が進められたものである。同地菜切の海岸堤の本格工事は実に昭和四十年（一九六五）九月開始であった。

お役所仕事はたしかに有難いものではあるが、反面遅々として時間のかかることも多い。つねに地域住民の熱意によってこれを促進しなければならぬ。昭和二十三年（一九四八）仁淀川は直轄河川に編入されたが、改修喫緊の仁淀川堤防の工事が開始されたのは、実にその翌々昭和二十五年（一九五〇）九月伊野町羽根の工事であった「高知新聞」。国の仕事ともなれば、調査研究にも万全を期して時間を要する点もあるだろう。したがって地元はこれに対して、翌昭和二十六年（一九五二）十二月、ついに仁淀川改修期成同盟会を正式発足させ、高岡町（土佐市）公会堂の発会式では、建設省への工事促進陳情を決定する。高東地方が中心となっているようであるが、また吾南、高東に共通の利害に関するコンセンサス成立と理解されるであろう。

すでに度重なる台風被害の危険箇所となった新川北方仁淀川堤防に、県費支出で仁淀川堤防嵩上げ工事が、工費予算七百万円で大成建設により施工開始となったのは、昭和二十六年（一九五二）十二月であったが、いよいよ本格的に吾南に堤防工事が進められるのは、翌昭和二十七年（一九五三）からであって、「高知新聞」の伝えるところでは、仁淀川改修工事は二区となり、その施工の実施は右岸を高岡工事出張所が、左岸（春野地区）を弘出岡工事出張所が当る。弘岡出張所は弘岡上ノ村小学校付近に事務所を置き、伊野町以南の堤防工事はいよいよ建設省の監督下に、工費三分の二は本省負担、あとを県と地元切半負担で進められる。

当初昭和二十三年（一九四八）直轄河川となったとき、十二億円の巨費を投入する継続事業として進められたが、その間工事の進捗には迂余曲折は免がれず、また巨額となれば地元負担も容易ではない。ここでさらに蜀を望むのは自然である。昭和三十九年（一九六四）以来一級河川への激しい運動は続けられ、ついにその目的は達せられて、昭和四十一年（一九六六）一月内定する。内定とは決定も同様である。今も仁淀川堤上に「一級河川仁淀川」の標示を見るが、これは一つには国家―政府の力を誇示するものであるが、また粘り強い住民の運動の勝利―凱旋門でもある。実に国費負担は工費の四分の三となった。

かくて経済成長のなかで計画は拡大強化され、昭和三十九年（一九六四）度までに七億九千万円を投入したのを、さらに同四十年（一九六五）より五カ年間に、十一億円投入となる。従来の堤防とは比較にもならぬ巨大な堤防は、ついに行当―森山間ばかりでなく、実に伊野町より仁西地区西畑南端にまで連なる。海岸のいわゆる黒潮ライン兼用の防潮堤も完成した今日、今や川と海との猛威にも完全に安全といえそうである。これに弘岡上の行当より

南に外堤―霞堤が加えられ、最大の弱点の一つとされた弘岡上楠神社付近を護ることになった。吉良堤の近代的発展である。

しかしながら、これをもってわが郷土の水防は万全とはいえないであろう。由来外水―仁淀川洪水に対して、人びとは内水―新川川の洪水、滯水も怖れている。⁵⁾新川川は交通路としての使命を今や完全に失ったが、排水路としての使命は、吾南開発の発展とともにいよいよ重大となる。しかるに新川川の改良については、「高知新聞」の伝えるところでは、昭和二十七年（一九五二）一月、三カ年計画予算三千万円着工とあるほかに見当らない。これは甲殿付近出口に関係したものであろう。全流域にわたる抜本的改修は、いよいよ現時点の政治の日程に上ったのである。合併以来つねに重点目標の一つでもあった。誰かの手によらねばならないこの大事業は、おそらくは野中兼山に続く偉大なものとなるであろうと思われる。なお前記巨大な連続堤防の完成は、もちろん喜ぶべきことであるが、これがかえって洪水に対する関心を弱め、近代的施設に完全に頼ることの危険について一言しよう。多くの学者、技術家の指摘もこの点にある。いかなる堤防もけっして万全ではないという。つねにわれわれは先輩が身命を堵して守ったように、堤防を守る心構えを失ってはならないであろう。

水 利 本書においても、幾度となく野中兼山以来の八田（弘岡）堰、弘岡井筋について述べてきたが、大正期、昭和期と堰、井筋の近代化は進められ、木工沈床―コンクリート化によって、堰は昭和五年（一九三〇）ほとんど旧観を止めない状態となったほか、用水路にも多くの改善が行なわれたため、あるいは抜本的とさえ考えられるほどであった。

しかしながら長い戦争の間に、補修は止むをえず怠られた。仁淀川の度重なる洪水には、外見ほどに新堰も抜本的ではなかった。戦争が終った時、改めて人びとは堰の破損の大きいのに驚かされる。また用水、堰の水漏れも問題となった。堤防同様に南海地震の加えた堰の破損もある。「高知新聞」の伝えるところでは、すでに昭和二十二年（一九四七）一月五日伊野町民は、八田堰の破損による洪水の被害を憂えて町民大会を開いている。こうして以後水防と水利との工事は、たがいに関連を持ちながら地元と国、県との間の協力、反撥を織り交ぜて進められる。もっとも水防が、危険の点から国家の力をより利用する動きを示したのに対し、水利は受益者負担の意味で県と地元の力を中心に、より伝統的な動きを取った等若干の相違はあった。この点水防関係の仁淀川水害予防組合が、解散して跡を止どめないのに対し、弘岡井筋普通水利組合は、昭和二十五年（一九五〇）土地改良法施行により改組され、改めて吾南土地改良区事務所として、現在もなお活動しているのに対比される。もっとも堰、井筋のこの期の文字通りの抜本的大改修が、後述のように、国の愛媛県のいわゆる道前、道後平野の大開発計画推進と関連する、国家資本の投下の結果と考えられる時、もはや両者の間に相違はほとんどなく、公共施設に対する国家の関与という戦後の動きが、ここに示されたものである。

県が八田堰改修に乗り出したのは、昭和二十六年（一九五二）十一月であった。度重なる台風、吾南一千町歩の取水はいよいよ困難となったからである。工費約七百万円で翌二十七年（一九五二）三月末完工する。この時土地改良区事務所の常任理事武政孫一郎氏（一八九二―）考案の、鋼鉄製自動開閉式門扉が土砂吐き門扉として設置され、全国的にも珍らしいと「高知新聞」は報じている。もちろん工事は復旧作業中心の小規模なものであったが、当時の工費七百万円は地元負担を超えるものであり、県の援助なくしてできることではない。

「高知新聞」の伝えるところでは、前述愛媛県に向っていわゆる仁淀分水―上流面河川の一部を愛媛県側に分水―を行なうことが、表面化して問題となったのは、実に昭和二十七年（一九五二）であった。その前年には、すでに堤防工事のため建設省の弘岡工事出張所が設置されている。この両年こそ、戦後の新しい農村作りの画期

とすることができよう。仁淀分水については、もちろん当初激しい拒否反応を示す。昭和二十八年（一九五三）七月二十五日の「高知新聞」記事には、吾南開発協力が絶対反対を表明、農林省係官の調査結果―下流に水不足を生じることはない―など信用できるものではない。吾南平野の死活問題である。反対のためには総決起大会も辞せないと意気巻く。同年十月三日の同紙には、分水点の実地視察を行なった吾川郡の全町村長を代弁して、弘岡中ノ村々長森岡深太氏が、下流での減水は確実であるとする。視察後も反対の決意にはまったく変化はない。

高知、愛媛両県の間立って、国全体の立場から調整の位置につき、事態の円満解決―愛媛県に分水することにも、高知県にも有利となる施設を施す―を進めたのは、実に農林省岡山農地事務局であった。これは同年七月仁淀分水計画が農林省直営で、翌昭和二十九年（一九五四）より着工、五カ年、工費四十四億と計画が決定したからである。驚いた分水反対の吾南各村の村長らは、八月ただちに大挙上京して反対を陳情、帰県した協力会長川田卓爾（一八九五―一九六一）弘岡下ノ村々長は、さらに猛烈な反対をと懇える。おそらく前古未曾有の難問と受け取られたことであろう。たしかに上流で水を取られる。水は減るに違いない。田圃はどうなるか、紙を漉く水はどうなるか、反対はきわめて自然である。

しかしながら、水防を通じて仁淀川に対する国の管理権は強まっている。結局はこれに従うことを余儀なくされるだろう。そうとするならば名を捨てて実を取る。水は分けてやってもなお困らない方法はないか。八田堰と井筋の抜本的改修によって、かえって一種の禍いを転じて福とすべきではないか。かくて前述県の応急的な八田堰改修とは比較にならぬ大計画が進められる。この時重要な役割を果たしたが、かつて明治―大正と、農会方面を通じて地方政治に関与した、弘岡下ノ村出身勝賀野鬼子馬（一八六六一―一九三七）の子息で、当時吾川郡選出県

会議員勝賀野泰長（一八九二―一九六八）であった。「高知新聞」昭和二十八年（一九五三）十一月十一日によれば、当時吾南土地改良区理事長であった泰長は、この問題に関して発言し、分水問題は要するに補償問題である。県が現在計画中の吾南用水路改修工事に上積みして、農林省に用水路工事を要求してはとする。当時の猛反対の空気のなかでは勇気のいる発言であり、また冷酷ともとれる冷静な合理的計算でもある。

もっとも民主政治は、相互の納得へと時間を要するものである。昭和三十年（一九五五）九月二十一日の「高知新聞」記事でも、なお仁淀分水には吾南地区は絶対反対の態度を崩してはいない。役員会ではこのことを決定、各方面に猛運動を申し合せている。ところで前年の十一月には、弘岡上ノ村の用水路改修現場で、工費一億二千万円余、五カ年計画で、十二キロメートル余の吾南用水路改修工事の起工式が行なわれる。岡山農地局長代理、副知事、関係村長、工事関係者、県議会議員がこれに参列する「高知新聞」。もちろん農林省が工事に乗り出したものである。絶対反対を唱えながら、事態は長いものに巻かれていく姿というよりは、すでに事実上、勝賀野県議の示唆する方向へと進んでいたものである。昭和三十年（一九五五）十月には、県に設置された高知県仁淀分水問題対策委員会委員の前記勝賀野県議らは、松山市に久松愛媛県知事を訪い、高知県における減水を憂える地元の人びとを納得させるため、さらに有効な水利改良を要望したが、これは交渉がようやく詰めの段階にきたことを示し、国のほかに愛媛県からも応分の補償を求めたものである。

ついに、昭和三十一年（一九五六）十一月十三日の「高知新聞」の記事によれば、問題の結着がつき、仁淀川下流沿岸農業改良事業計画が確立する。高東、吾南を併せて五億三千万円の投資が行なわれ、内国は五割を負担し、残りを県と地元で切半である。これによって八田堰は改めて完全に改修され、また幹線水路は巾五・八メートル、深さ二メートル、長さ二十キロメートルにわたって完全コンクリート化される。県営として昭和三十三年



西畑水路出口 (岐神社前)

野県議の活動も、いつてみれば戦後日本の経済成長に支えられたものである。もとよりそれが、何等その功績を左右するものではない。時代に棹さすことは政治家の本性である。それにしても野中兼山の事業はまことに永遠である。そして、この井筋を守った郷土の先輩の努力もまた永遠である。井筋に立って流れる清流に懐古することは、われら後輩の先人に対する礼儀であり感謝であろう。そのなかからまた先人をつぐ

である。弘岡井筋に、そのほとんど半生をかけた門田益穂死して実に二十五年である。まことに感慨深いものである。堰の完工におくられること二九年、井筋の工事も昭和四十二年（一九六七）三月で一部を残して完工する。新たに仁西水路が加えられ、二つのトンネルで森山側より導水される。トンネル技術のなかった兼山時代には、想像もできなかった新しい井筋の発展であった。

いま春野町役場庁舎前広場の一角に、勝賀野泰長の胸像が建っている。その碑文には「夙に、郷土産業振興の為に献身努力すること二十有余年、就中野中兼山先生の遺業である用廃水路の現代的大改修を為すなど、其の業績を顕現し茲に藍綬褒章を授けらる」とその功績を讃えている。用水路の大改修はなお残された問題であるとしても、仁淀分水問題を捉えて、一挙に弘岡井筋の抜本的な大改修を指導した政治力は改めて評価されよう。ことに分水を政治問題とし、いわゆるギブ・アンド・テイクの合理主義によって問題解決―条件闘争を進めた政治的機略は、長い春野地方の歴史にも少ない点と思われる。井奉行の時代、常設委員の時代をへて、戦後の吾南土地改良区と水利を指導する人物も幾変遷を重ねたが、結局は時代の変化が登場人物を変えたものではなからうか。勝賀

（一九五七）より五カ年計画で着工となる。水不足は永久に克服されるはずであった。事実完工後滾々として流れる豊富な水量を見れば、近代的工法の恩恵を感じないではいられないであろう。それとともに国の力の偉大さも改めて身に染みよう。

ところで、八田堰の改修にはなお問題が残された。由来この堰を挟んで川上の伊野方面と、川下の吾南では利害対立の感情があった。とくに川上では堰による洪水の被害増大の懸念がある。伊野町議会は八田堰改修反対を打ち出す。これには分水補償が農業偏重であるとの理解もあった。伊野町の住民感情としては自然であろう。農工漁同時補償が県でも打ち出され、愛媛県はついに二億一千万円の補償を呑む。問題解決はこのように困難であり、時間のかかるものである。こうしたいわば紛糾から改修工事は四年間もおくれたが、いよいよ昭和三十六年（一九六一）から急ピッチで工事は進む。もつとも前述八田堰を、県の計画では従来より二十センチメートル嵩上げし、それによって毎秒六・五トンを取水することとしたのに対し、伊野町は納得しない。工事はここでも難渋する。ただ伊野町には、かえって製紙業者は水が豊富になると賛成するという微妙な立場があった。

まったく、難航に難航を重ねたというのはこのことであろう。昭和三十八年（一九六三）十月十三日弘岡農業高校での、八田堰改修の起工式について漕ぎ付けるまで、実に十年を超える歳月であった。上流地域に不利を生ずることのないように、いくつかの了解事項を約束したうえ、工費一億九千万円で、堰の高さ約九メートル、左岸に取水ゲート四、毎秒六・五トンの水を受け入れるとともに、洪水に備えて自動転倒ゲート二基を備える。これによって新たに吾南に水田八十七ヘクタールが開かれ、米七百五十四トンの増収が期待された。取水開始は翌昭和三十九年（一九六四）三月十日であった。また完工したのは昭和四十年（一九六五）三月のことである。いま堰の東端に近い道路脇に立つ記念碑は、堰と井筋にかけた吾南の人びとの執念と、目的を達した喜びを語るもの

勇氣と知恵と団結は生まれる。完備した用水路に、かえって先人の労苦を忘れがちであるのが人情である。改めて歴史の重みを感じなくてはならないと思う。

水質汚濁 戦後経済発展の中で、春野地方にも、弘岡井筋―新川川の汚濁が問題となってくる。もっとも古く近世より神谷、伊野方面上流には製紙業がさかんであり、石灰を使用した原料調整は、もとより若干の用水の汚濁となったはずであるが、問題になるものではなかった。明治十九年（一八八六）伊野精紙会社設立による、大型マニユファクチュア工場の出現、さらに明治末期には機械製紙の導入等、伊野方面の製紙業は逐年繁栄に赴いたので、苛性ソーダ等原料調整用の薬剤の量も増加する。しかしながら、少なくとも第二次世界大戦中までは、なお吾南地方にこれという製紙廃液問題は起らなかった。川のいわゆる自浄作用の範囲内での、廃液であったわけである。

戦後ついに吾南用排水に廃液問題の起ったのは、「高知新聞」の伝えるところでは、大体昭和二十七年（一九五二）頃のようにである。この時点でついに廃液問題が起ったのは、一般には戦後経済の復興であるが、仁淀川の場合、伊野町に自家用パルプ製造が、紙会社によって行なわれるようになったからである。同紙によれば、すでに昭和二十三年（一九四八）十一月、パルプ工場の高知市旭地区設置が、公害の怖れありとして問題となっている。昭和二十七年（一九五二）当時、伊野町には日本紙業株式会社（二百馬力機械一台、高陽製紙株式会社）に百馬力二台、土佐紙株式会社（二百馬力二台等）のパルプ製造機が稼働する。当然その廃液はすべて仁淀川に吐き出され、川の東岸沿いに流下して弘岡井筋に流入するわけである。筆者は当時弘岡上ノ村で、茶褐色をなして流れる弘岡井筋を見、一驚を喫した記憶がある。

「高知新聞」によれば、昭和二十七年（一九五二）九月、すでに仁淀川污水対策委員会が生れ、南国パルプ外二工場の操業中止を命じて廃液を調査、その結果を十七日地方事務所で発表、仁淀川汚濁の原因にはパルプ廃液ばかりでなく、一般的に伊野町地域のいわば都市下水も加わっている。よって廃液処理は全体として考えなければならぬとしながらも、主原因はパルプ廃液であるとして、今後また廃液のいわゆる垂れ流しをした場合、会社は操業をいつでも停止すると誓わせる。記録は伝えられていないが、すでにこの以前から問題となり、春野地方よりの抗議が提出されたのであろう。

「高知新聞」昭和二十八年（一九五三）六月十七日によれば、パルプ廃液処理についていちおうの結論が生まれている。それは伊野町当局と工場側とで立案した対策を、地方事務所での仁淀川污水対策委員会が承認したものであって、工費約五百万円（半額県費補助見込）で、廃液をまず三インチパイプで九百六十メートル離れた沈澱槽に入れ、これを改めて、四インチパイプ四百メートルで、仁淀川鉄橋下流の中州に放流、砂泥に吸収させる装置を作るといっているのである。まったく一時の応急策というほかはないが、紙の伊野町とはいえ、多くは中小企業であった関係上、莫大な資金を要する廃液処理には耐えることのできない問題もあった。

もとよりこうした応急策が破綻するのは当然であって、やがてまた春野町より激しい抗議が出される。「高知新聞」によれば、昭和三十二年（一九五七）四月春野村代表二十余名は、パルプ廃液処理につき強硬に伊野町に申し入れる。もちろん吾南の農作物に被害を与えるというのである。久しきにわたり井筋を守ったものとしては当然である。伊野町は、さっそく手すきを含む全業者を集め対策を協議、結局全工場（手すきを含む）の廃液を三カ所に集めて処理することとし、また最終的な捨て場仁淀川原については、改めてブルドーザーで拡大整地して、川水となって浸出しないようにする。もちろん抜本的とは云えないが、問題は企業の弱体であり、また町もその面倒をすべてみる力はない。公害問題のむつかしさといえるが、その害毒を下流が負うことももちろん不

理である。

その後昭和三十九年（一九六四）八月、ある日突然に多量のあゆが斃死する。驚き怒った仁淀川漁業協同組合は、さっそく激しく製紙業者に廢液のなせるわざと抗議する。より完全な廢液処理施設を作れとの要求とともに、補償を求める。漁協組の言い分には大義名分がある。仁淀川の恩恵を子孫に残せである。県の紙業課長が、公害はいまや社会問題となった。業者も廢液対策を真剣に考慮しなければならぬと警告する「高知新聞」。以後も魚類の斃死はある日突然に起るが、工業側の補償で小康を得ている。抜本的な施策は、この状態のなかでさらに考究されねばならないであろう。なお現在建設中の大渡ダムの完成後には、全面的な仁淀川の河水の変質が、たとえば早明浦ダムのように憂えられている。つねに関心を払いつつ研究を怠ってはならないであろう。また上水に苦しむ高知市が、仁淀川取水を決め、八田堰下手よりの取水が計画され、すでに高知市朝倉針木付近には大規模な水道施設が着工されている。八田堰下手とあれば、弘岡井筋取水口よりも下流であって、弘岡井筋には直接関係はないとして、吾南地方に同意が得られたものである。しかしながら、春野町のたとえば園芸用の水はすべて地下水利用である。これらの地下水は仁淀川の伏流水である。問題がないとはいえない。ただ仁淀川のような広域河川の水資源の独占的、利己的利用は許されない時代である。そこに政治がある。つねに話し合いによって民主的合意が得られねばならないであろう。

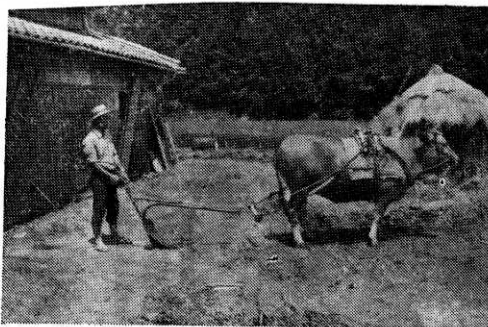
また仁淀川床に堆積した砂利も、貴重な資源として、建築用に昭和三十年（一九五五）頃より大量に採取された。経済繁栄をまるで象徴するかのように、仁淀川原にはダンプの轟音と砂塵が渦巻いたが、現在ではほとんど川原の砂利は姿を消すほどになった。これが洪水の害を助長し、護岸の堤防を危くするものと憂えられている現状である。仁淀川は国家管理となったが、川に沿って住む者には昔から村を守り生命を守って現在にいたっている。

国家管理となっても、堤防や川に対する関心を失ってよいということはないと思われる。

さて仁淀川の水質を守るに積極的なのは、仁淀川漁業協同組合である。前記製紙廢液問題にも熱心であった。時代とともに漁獲の減少するとき、たとえば「高知新聞」昭和三十四年（一九五九）五月三十日の記事にあるように、あゆ、うなぎ、こい、ます、かに、はや等を多量に放流してその生産増殖を助ける。ほとんど毎年のように、たとえば仁淀川口で稚あゆを捕えてこれを上流に放流する。こうした努力をしなければ、現在の川には魚族の成長が期待できない段階になったとすれば致し方はない。かつて近世末嘉永二年（一八四九）の大洪水に、西分庄屋辻儀之助の孫精馬は、洪水の庭にごりがいるだろうと喜ぶ。また明治末期秋山村では細川義昌が遊びにきた孫と裏の新川川でえびを捕える。門田益穂も多忙な農業の閑暇を求めてこひやふなやうなぎを捕って楽しんでだ。川を守って今一度これを甦がえらせたいと思うものは筆者一人ではあるまい。しかるに現在新川川の汚濁はどうであろうか。川は救いの手を待っているのではなからうか。

農業の復興と発展

米麦生産の復興と変転 戦後三十年、日本の産業経済は大きく変った。春野地方も、そうした変化をもちろんで避けることはできない。そのうち昭和三十五年（一九六〇）頃は一つの大きな区切りとなる。いわゆる池田内閣の所得倍増—高度経済成長政策の開始である。その以前と以後とでは、前者が農業の場合一も二もなく増産であり、後者は農家所得の向上への選択的増産である。かくてほとんど有史以来とも考えられる変化が起る。以下まづ米麦—主食品の生産から述べることにしよう。日本農業の根幹となって久しい歴史を展開したものである。



長崎幸郎氏と耕牛（西分川測）

米とともに、増産のつねに先頭に立ってきた麦の運命はこれとは大きく違っていた。戦後米同様に食料増産のもとより重点であったが、食料事情の好転とともに、その色はしだいに褪（あ）せてくる。とくに吾南のように、農家所得の向上へと園芸方面が重視されてくる所では、麦は無惨に疎外される。とくに西瓜、煙草との競合で減産が開始されるのは、早くも昭和二十六年（一九五二）頃からであった。もっとも煙草とは競合しながらも相互扶助的で、煙草移植後しばらくは麦が風除けに利用されていた。しかしながら、青々と成育する煙草の若葉に對比し、疎らに植えられた育ちの悪い麦を見た時、麦の時代がまた無惨に終焉に近づいたことを、思わざるをえなかったものである。政府が、麦の減反策を打ち出したのは昭和三十五年（一九六〇）であり、高知県の麦作がほとんど壊滅したのは、昭和三十八年（一九六三）であった。もちろん春野方面では、それよりは早

戦争中躍気となった食糧増産は、戦後もひきつづいて農業の最大の目標であった。肥料不足、農機具不足のなかで、人びとはひたすらに増産に励む。もちろん強制的な米、麦、甘藷の割り当ては厳しい。しかしながら余剰を生産すれば収入は増大する。いずれにしても増産また増産であった。たしかに戦争中からの酷使で地力は衰え、米の反当収量も減っていた。「高知新聞」の伝える所では、昭和二十五年（一九五〇）弘岡上ノ村で収量調査を行ったところ、反当一石四斗五升であった。このように生産力は低下していたものである。

こうして盛り上げる増産への努力のなかで、昭和二十四年（一九四九）高知県では、稲作の大敵稲熱病が大発生する。農民大会は開かれ危機を訴えたが、減収は何と十五万石といわれた。幸いにしてその後、農業試験場において、稲熱病特效薬セレサン石灰が開発され、この大敵の克服に強力な武器となる。ところでこの稲熱病の大発生が、はからずも、春野地方の伝統的農業生産の一つに止めを刺すことになる。近世後期のある時点で、堆肥（ゲンゲ）緑肥として栽培せられるようになったれんげである。幕末には「吉良宅快日記」にも、れんげの栽培とその肥料化が記されていた。かくて明治―大正―昭和とれんげは愛用され、ことに県下各地の要望に答えて、森山、弘岡はれんげ種の産地となる。その出荷販売が組合結成となり、ついに産業組合にまで発展したが、昭和三十年（一九五五）頃ついにれんげ栽培は終わる。いま見る田圃のれんげはひとり生えである。なおれんげの終焉は堆肥農業の終焉でもあった。一つには機械化―トラクター―導入のなかで、牛馬耕も放棄されたからである。

戦後農業の特徴の一つに、農業と化学肥料の多用があげられる。昭和二十五年（一九五〇）頃より除草剤二四Dが試みられ、以後研究の進むとともに昭和二十八年（一九五三）頃PCPも除草剤として使われる。除草剤の使用の意義は大であった。炎熱のなかで農民を苦しめた草取り作業が止んだからである。いねの成育期には、かならずといってよいように、田圃を這う人の姿を見たものであるが、いまはそうした人を見ることはない。明治

末期頃よりの、除草機の発明をはるかに上廻る技術革新であった。

薬剤の使用は、除草剤に止まるものではなかった。稲の大敵螟虫―三化螟虫に対して、ついに駆除剤ホリドールが使用される。昭和二十九年（一九五四）ごろからである。これによって長く親しまれた誘蛾燈も止む。農業は稲作の安定と直接結び付き、昭和三十年（一九五五）には、米の供出にいわゆる予約米制が開始される。米作の増収と安定の結果であって、かくて昭和三十三年（一九五八）には、有史以来といわれる米の大豊作となる。この年をもって、戦後農業の復興は成就したとすることができよう。多収穫品種として、その名も高い農林二十二号が、人びとから注目を浴びるようになったのもこの頃である。

く麦作には見切りが付けられる。もともと米は田に、麦は畑にが原則であった。そして米は夏に麦は冬にと季節を別けていた。それを合せて、見事な二毛作に編成したのは鎌倉時代の農民のすぐれた考案であり、吾南地方では、それが野中兼山の水路建設によって達成された。以来吾南の沃野は、米と麦との巧みな組み合せを中心に高い生産を誇ったが、すでに世界恐慌波及による養蚕の大打撃から、西瓜等の水田への栽培が開始され、麦作にはやうやく退勢が訪れる。しかも戦争中の食料増産によって、一時起死回生したかに見えたが、ついに戦後の農業復活のなかで止めを刺される。いまやほとんど、麦の歴史もまた終った観がある。

こうした米の増産推進を中心にした、戦後農業復興に大きな役割を果たしたものに、県の吾南農業相談所―農業改良普及所がある。この施設は、県の機構改革によってその後現土佐市の高岡へ移って、現在もなお吾南、高東にわたって活動しているが、昭和二十四年（一九四九）設置され、同三十四年（一九五九）設置十周年が祝われた間の十周年は、まさに農業復興期と一致し、そのいわば尖兵として重要な役割を果たしたものである。今もたとえば弘岡下の山下松実氏（二九〇七―）のごとく、その努力と功績を讃えるものは多い。改良普及所の仕事は、農業技術の改良、農業経営の改善、農家生活の向上等に分れ、占領軍の始めた日本農村の近代化政策と照応するものであった。聴込みによれば、当時吾南農業改良普及所には、約七人の職員が勤務し、県よりは自転車を買与され、村の隅々まで活動する仕組みであった。この自転車は「緑の自転車」と呼ばれたが、また「畦道自転車」とも愛称された。農家は昼間は労働し、夜間に普及員を呼んで研究することが多かったので、勢い普及員の勤務は、昼夜兼行となる。普及員―不休員と呼んでいたというが、まことによく表現されたものである。働くものも、また指導するものも、ともに祖国―民族の復興が食料増産にあることを自覚したことを語るものであって、今や歴史の彼方に、忘却されようとするこれらの人びとの努力は、改めて記憶されなければならないであろう。米

の増産のほかに、ビニールハウスあるいは酪農の研究、台所とくに竈かまどの改善等各般について、熱のこもった指導が行なわれたが、これは世界恐慌後の農村指導に、重要な役割を果たした実業補習（公民）学校の、専任教師の仕事に対比されてより実り豊かである。

たしかに大正末期―昭和初期には、農村には活発な青年団活動があった。その中心となるのが実業補習―公民学校であったが、それに比較すれば、終戦後の農業復興期には、春野地方の各村の各部落に、農業研究会―農研―が多数生まれ活発に活動し、その活動とタイアップしたのが、前記農業改良普及所の普及員であった。「高知新聞」昭和三十八年（一九六三）によれば、たとえば諸木村では村より補助を与えられ、内谷十五日会、灘農友会、池ノ上愛農会、諸木中組農業研究会、西諸木農業研究会等が活動、また同年弘上農業研究会は、三井普及員を招いて、「肥料の使い方」を聞く、西分公民館も村内各部落を廻って農事の相談にあずかったのであって、同紙の伝えるところでは、昭和二十八年（一九五三）が、この活動の最高潮といえるようである。

前記昭和二十八年（一九五三）の各地区農研活動の全盛は、実は戦後農業の苦悶の現れである。増産一本槍では農家所得の向上とかならずしも一致しない。ことに食料豊富―アメリカの余剰農産物の輸入も加わり、その経営の前途は不安に満ちていた。従来の上からの指導のみでは解決のつかない新局面である。おそらく日本農業としては有史以来であろう。暗中摸索にも近い苦悶のなかで、昭和三十年（一九五五）頃、ビニールハウスによるいわゆる施設園芸にむかって新しい展開を見せるが、この点については後述するところである。

米の増収を契機にして、農業の機械化は耕耘機を先頭に進み、日本にもアメリカ式農業―経営規模拡大による、労働生産性の増大―も可能ではないかと考えられる時点、すなわち昭和三十六年（一九六一）政府は、農業基本法を制定公布する。これに対応するかのようには、「高知新聞」によれば、秋山の春日地区の婦人五人は、各

四反計二ヘクタールを持ちより、昭和三十八年（一九六三）三月から春日生産協同組合を結成、共同経営を開始する。この成否とは別に、その意気は買われるべきであろう。

しかしながら農業基本法は、日本農業には十分適合でなかったとの批判がある。日本経済の繁栄とくに工業生産の増大によって、小農層を中心に農村より労働力は流出し、所得の増大を求めた多くの人たちは、農業構造の改善よりは都会へ工場へとまず走ったのであった。春野地方でも、すでに昭和三十七年（一九六二）害虫の共同防除のための若者が不足し、十分な防除ができない破目となる。昭和四十年（一九六五）には、春野町は農協と協力して、害虫防除を希望者より請負うことになる始末であった「高知新聞」。中国の古語に「霜を踏んで堅米至る」「易经」というのがあるが、麦についてついに米の減産政策が政府より示されたのは、実に昭和四十五年（一九七〇）であった。

米の生産は、昭和三十三年（一九五八）以来ほとんど平均して順調であり、いわゆる食糧制度を揺がすことになる。古米あるいは古々米として戦後の生活向上のなかで、その売れ行きも問題になる。高知県でも予約売渡し米百万俵―四十万石である。ついに国は米の減反を打ち出すことになる。各方面に論議を呼んだが、長期展望に立った国の食糧政策よりも、当面の切り抜けが政治のなかでの強い発言となり、ついに反当若干の減反奨励金によって減反は行なわれる。弥生文化―稲作伝来以来の愕然たる歴史であった。おこめとして、文句なしに尊重されたものの耕作が部分的とはいえ禁止され、作らない所に奨励金が与えられる。転作はまだしもとして、これは後に問題を残す結果となっていくであろう。もちろん資本主義下の農業として、多収穫米より良質米への転換はあるいは自然であるとしてもである。

春野町内にも、減反によって荒廃した水田が各地に見られる。多くは低湿地であるが、これは約二千年前最初に水田が開始されたいわば由緒の地である。時代の変化によって真先に捨てられる。捨てられた理由は生産が低いからである。生産第一主義は重要であるが、たとえばかつての木塚城跡東南方の荒廃した水田が、戦国の国木塚氏によって開発され、その勢力を支えたことを思えば、また歴史の激しい流れを感じないではいられないであろう。もっとも感傷は慎しもう。こうした減反政策はすでに破綻し、昭和四十八年（一九七三）ついに打ち切られた。国の強い力に対しては従うほかはない末端では、虚しい思いをする人も多いであろうが、多くの人たちは園芸や兼業によって切り抜けたので、心に落した^{かぎり}も東北の人たちの方ではなかったであろうか。いまや春野地方の代表的な農業の、いわゆる施設園芸について記すべき順序となった。ただここで締めくくりとして、戦後における稲の品種を表示しておこう。「門田瑞穂日記」等によったものである。

年 代	戦 後	現 在
品 種	早穂増、遅穂増、赤坊主 千本旭	越路、農林二十二号、きよにしき とどろきわせ、土佐にしき

近世末の白坊主、千本等も大正期の神力、お銀より、王子もすでに消えた。

園芸の復興と選択的拡大 米、麦、甘藷を中心に戦後主食増産が進められた時、他方また各種のいわば、園芸作物とも総括される食料品の増産が進められた。由来日本農業は米、麦中心ではあったが、収入補填のための、いわゆる商品作物の栽培が近世以後進められた。この傾向は近代にも持ち込まれる。とくに地主小作関係のもとで、いわば血みどろの労働から生まれたのであった。そうした商品作物のうち吾南地方では、昭和初年の大恐慌でくわー蚕が姿を消し、西瓜を中心になす、きゅうり等に新しい努力が傾けられ、従来からのかぶ、だいこん等と



中島鉄馬肖像

を運んで床を作る。これに温床仕立ての苗を定植する。海に近いこともあり成熟は早く、したがって出荷も早く高値を呼ぶ。以後昭和三十年（一九五五）代にかけて発展し、昭和三十六年（一九六一）の全盛期には、耕作農家百戸、栽培面積六十ヘクタール、産額千八百トン「高知新聞」といわれる。筆者は、当時依頼を受けてその出荷状況を視察したことがあるが、つぎつぎに運び込まれる西瓜の山は、まことに壯観の一語に尽きるも

ともに、戦後の園芸への遺産となっていく。とくに西瓜は戦争苛烈のなかで減反を命ぜられ、ほとんど命脈を絶ったかのごとくであったが、その開発した技術は、勤勉な人びとによって保持され、見事戦後復興への土台となるのであった。

さて戦後なお数年間は主食の供出、販売には厳しい統制があり、自由な経済活動は抑えられたが、生産については急速に統制は撤廃され、生産意欲は刺激されて増産は進む。その先頭を切ったのは、甘蔗―砂糖、西瓜、たばこであった。いずれも米とは競合しないところに復興の条件があった。甘蔗は砂地の畑作であり、西瓜、たばこは遅いねと調和できる仕組みであった。その点芳原、諸木方面のい草も同様であって、「高知新聞」昭和二十七年（一九五二）七月二十九日によれば、これら西瓜、たばこ、い草あとの稲の植付が真盛りで、多忙な光景を呈したことを伝えている。甘蔗はとくに仁西方面が明治―大正まで伝統があり、砂糖不足を反映して急速にその栽培は進められ、「高知新聞」昭和二十三年（一九四八）十一月の記事には、仁西村は砂糖王国といわれる。もともと外国糖が急速に輸入されたので、砂糖景気は東の間のことであった。昭和二十四年（一九四九）には砂糖の統制は撤廃され、翌二十五年（一九五〇）には、白下糖の値下りが早くも問題になっている。以後年を逐うて衰えたものである。「門田瑞穂日記」昭和二十一年（一九四六）一月九日には、甘蔗百貫を砂糖にするため、松保佐二合を製造所に提供したとある。思えば都鄙ともに甘味に飢えた頃のことである。同日記にはまた同じ一月の二十七日に、漬物一挺半を漬けたが、それで塩がなくなる。止むをえず残り半挺分は醬油粕等で漬ける始末であった。門田家は大正期漬物五十挺ほどを売却し、また関東大震災には、吾南地方より漬物大量を東京方面へ救済物資として送ったこともあった（前述）。まことに変れば変る世の中である。

漬物といえば大根であるが、大根の千切が吾南とくに弘岡上ノ村を中心に中島鉄馬により紹介され、すでに戦前、戦中と呼び声が高かったが、これはまず真先きに復興したものの一つであろう。大型の竹の簀の子を太陽に面して斜めに立て、晩秋、初冬の田圃をほとんど白一色に染めた光景は、現在のビニールハウスに遜色のないものであった。また川窪古梅氏（一九二〇）は同じ大根のさくら干しを開発する。長い伝統の逸品と評価をとった弘岡かぶも、もとより大根同様に稲作と結んでこの期の花形の一つであった。また瓜類のなかで、なお主食の甚だしく不足した戦後好評を呼んだのは、赤皮栗南瓜であった。石川県原産といわれるこの南瓜が、厚い濃い緑色の葉のなかに、ひときわあざやかに転った姿も記憶にまだ新しい。これら瓜類は、戦前の温床研究によるトンネル式促成技術によって、稲作との調和を得たものである。

西瓜の復興も意外に早く、「高知新聞」の伝えるところでは、すでに昭和二十六年（一九五二）、その栽培がはなはださかんとしたとあるが、注意されるのは西畑の川原西瓜である。これは仁淀川の川原―砂地の自然の熱を利用するものとして、すぐれた創意をもってすでに戦前より始まっていたが、いち早く昭和二十四年（一九四九）栽培が復興される。川原を各人の権利に従って区分―地押えをし、穴を掘りあもずの淵の上手の肥えた川土

のであった。その後約五年川原西瓜は激減し、昭和四十二年（一九六七）には、ついに栽培農家三、栽培面積一ヘクタールとなった。もちろん現在はずでに滅び去った。何故にかくも急速に滅び去ったのか、その原因の穿鑿（せんさく）は別にして、川原西瓜の全盛期には、今日のいわゆる施設園芸が、ようやく基礎を確立しつつあったものである。川原西瓜の盛衰と同様であったものにたばこがある。たばこが戦後奨励されたのは国の方針と思われるが、作る側も取引の安定は魅力のあることであった。売るための商品となれば、市場価格の不安定はまったく頭痛の種である。「高知新聞」昭和二十七年（一九五二）二月には、弘岡上ノ村に煙草組合の活動した記事があり、また同紙昭和三十一年（一九五六）一月の記事にも、吾南十二カ村のたばこ耕作組合の活動が伝えられる。たばこの歴史も慌ただしいものであった。しかしながら、今も時にひっそりと残骸―廃屋のような乾燥場の建物を見ることがある。やはり戦後のある時期農家の支えとなったものである。

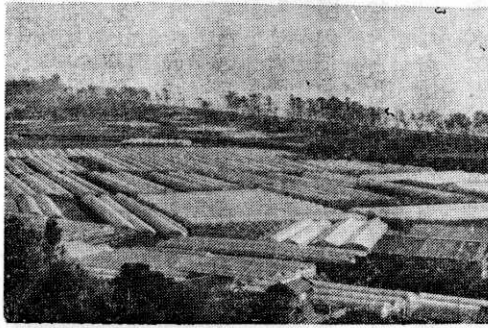
戦後十年余、その間に主食の米、麦、甘藷にも大きな変化のあったように、園芸方面にもこのように幾多の変遷が継起した。少しでも所得を増し、少しでも生活の安定と向上をとというのは、まったく戦後の人びとの共通の願望であった。そうした願望のもとに祖先以来の伝統である勤勉努力と、農地改革による自作経営を武器にして、この期にいわゆる試行錯誤が繰り返されたと考えられるが、そうした試行錯誤のなかで、施設園芸―ビニールハウス栽培は根気よく進められたものである。

もっとも完全な創作は歴史の上にはない。ビニールハウスが、戦前の油障子利用のいわゆる温床栽培の知恵を土台にしたものであることは周知である。速成園芸の先進地長岡郡十市村（南国市）で、ビニール使用の研究が開始されたのは、実に昭和二十六年（一九五一）という「高知新聞」。同紙によれば、翌昭和二十七年（一九五二）十月、前述吾南地区農業相談所の肝煎で生まれた吾南ビニール研究会は、油紙に代って、ようやくその声価を高め

ていたビニール使用を試験的に研究する。これは重要な歴史であり、この時点より急速にビニール使用は普及していく。その後五年、ビニールは油紙とたがいに対立しながら使用されたが、温床紙には昭和三十二年（一九五七）四月不幸な事件が起る。高東地区（土佐市）で使用した温床紙が、栽培していた作物に被害を与えたことである。これは温床紙に止めを刺す結果となる。ほとんどまったく急速に温床紙の使用は止む。同紙によれば、同年十二月突風のため仁ノビニールハウスは破壊され、半促成のトマト二十町は大害を受け、約五百万円の損害とある。ビニールの使用は五年間に驚くほどの早さで普及していったものである。石油産業を中心に、日本経済の復興のめざましいことも関係がある。

すでに大恐慌前後、前田福太郎氏ら弘岡中ノ村の人たちが、なすを中心に加温栽培の開発に成功、むしろ十市村（南国市）に先んじていたことについては述べたが、この同じ昭和三十二年（一九五七）二月二日の「高知新聞」には、弘岡農業高校で、加温園芸の研究が進められ、同校生徒は、泊り込みで加温のためのボイラー焚きに精進する。地元の期待を負った同校が、地元の期待に答えようとした姿勢を示すものであって、すでに同校では数年来研究を進めていたという。この時のボイラーが、重油を焚く現在のものと、同じであるか別であったかはあまり問題ではなく、その後急速に加温栽培へと進む。とくに、その後五年をへた昭和三十七年（一九六二）のビニール二重張りの工夫は、朝夕あるいは雨天の、ビニールハウス覆いこもりの片付け等の労働を皆無にするとともに、ビニール大型化、すなわち作業の能率化を進め、これがまた加温設備拡大とも無関係ではない。こうして現在にいたる約十年間に、加温利用大桁ビニールハウス栽培がもはや確立し、完成したものである。

ビニールハウスによるいわゆる大規模施設園芸の発達は、また池田内閣以来の所得倍増政策とも照応し、農業基本法の打ち出した自主農家の育成、すなわち農業の選択的拡大とも一致する。ビニールハウス栽培に、生き残



ビニールハウス風景(甲殿)

十三年(一九六八)設置される。しかも周知のようにみかん価格は増産によって低落する。またハウス園芸に方向転換する者もでて、荒倉山に開かれた広大な蜜柑園の経営は大きく行き詰っている。苦心開拓に当たった人たちの失望と挫折感は大きく、この種の共同事業の困難さを示しているが、指導に当るものもまた反省する必要があると思われる。

東諸木に設置された大規模硝子張温室は、大規模施設園芸集中管理モデル団地と呼ばれる。その厳めしい名称のように堂々たる施設である。ビニールハウスとはまた雲泥ともいえる相違である。敷地面積約三・七ヘクタール、施設面積二・八ヘクタール、資金約三億円の三分の一強を国の補助、残りは長期融資に仰ぐ。組合長岩田幸夫氏(一九六二)以下組合員十人、各人二棟

れた農家は現在の生産力の担い手である。したがって専業農家の範疇に入る。多くの小規模農家はかくて飯米農家となり、収入の多くを他に求めるようになる。戦前の地主小作とは、また別の階層が農村に生まれることになる。いま弘岡下の、典型的なハウス農家山下松実氏よりの聴込みによれば、現在のハウス一反の粗収入約二百万円、二反作れば四百万円である。したがって一町歩の粗収入約百万円の米作との比は四対一である。飯米農家はその収入の多くを農外収入に求めるように、ハウス農家にとっても、米はもはやその生活にとって重要ではあるが、致命的ではない。こうしてハウス農業の発展により、農業暦も左表のように一変する。

期 間	農 作 業
九月	水稻收穫、園芸用育苗
十月	ビニール張、育苗(鉢植)
十一月	苗の定植
十二月―五月	手入と收穫
六月	田 植
七月―八月	稲の手入

(弘岡山下松実氏)

と変貌したといえるだろう。もっとも同氏によれば、出荷期には朝は五―六時から、晩は八―九時までと十五時間もの労働がある。ここにはなお、日本的農業―異常なまでの勤勉は脈々と生きていけると言えるようである。

さてここでは是非触れなければならないのは、弘岡中南部出身の近沢頼雄(一九〇〇―一九六七)である。渡米以後五十年、アメリカのロスアンゼルスでセロリーキングと呼ばれた父安次の農園を継承し、親切と信用を第一と

して勉勵し、その産物はナンバーワンを称せられる「近沢頼雄墓碑銘」。まさに伝統的な土佐―高知県のデンマークの技術を海外に發揮したものである。また故郷を思う心も深く、終身渡米青年を受容して指導する。南部の大火には百万円の巨費を送って復興に尽す。緑白綬有功賞はまことに当然の榮譽であろう。

つぎにビニールハウス發達とほぼ同期に、自立農家育成へのいわゆる構造改善事業は進められ、国家資本の投下―補助、融資―によって、蜜柑園、硝子張温室栽培の進められたことに触れよう。「高知新聞」によれば、昭和三十五年(一九六〇) 弘岡中伊予川柑橋研究会が、二・五ヘクタールの開墾に着手したのが始まりであった。以後県の奨励もあり、蜜柑園は拡大の道を辿る。同紙によれば昭和四十年(一九六五)蜜柑園は七十ヘクタール、さらに同四十二年(一九六七)には百二十ヘクタールに達する。国の補助により、広域選果場が土佐市に昭和四

だいこん、かぶかあるいはい草栽培が少量加わるほかは、一年のほとんど三分の二をビニールハウスで過ごす。このように簡単なものである。もっともビニールハウスの作物は輪作から、きゅうり、なす、ピーマン、トマト、豆類と多彩であるが、いかに完全に売る農業であり、単一耕作である。米、麦、豆、野菜、蚕、牛馬と複雑な組み合わせの上に立った日本農業、その發展の極致である大正―昭和の土佐―高知県のデンマークの姿はそのままには見られるものではなく、アメリカ式商業的農業へ



細川会館 (三浦漁協事務所)

また海岸地方の漁業について一言しよう。耕地について戦後農地改革が行なわれたように、漁村―漁業民主化の線に沿い、昭和二十五年（一九五〇）三月十四日、漁業制度改革が実施され、国より補償金をえて従来の漁業権は整理されたが、かつて細川義昌が県水産組合長として努力設置の、土佐湾近海大専用漁業権に関しては一億五千万円の国の補償がえられる。この資金は高知県漁協等の育成に宛てられたが、一部は昭和二十九年（一九五四）現在の細川会館―仁ノ、甲殿、戸原合併結成の三浦漁業協同組合の甲殿の事務所―の建設となる。まことに記念すべき建物である。

年次	生産戸数	生産枚数	生産価格(円)
昭四九	一七戸	二〇三、六四〇	一八、六九九、〇〇〇

諸木農協は一時活動中止に追い込まれる。結局完全な立直りとはならず、ハウス園芸に転換する者も多く、昔と違ってしまう。春野町産経課の調査によれば、昭和四十九年（一九七四）度における情態は左表である。

二十五アールを経営するが、暖房、温度調節、灌水等すべて自動的という堂々たる設備に、メロン、トマト等を栽培する。昭和四十八年（一九七三）九月着工、翌四十九年（一九七四）三月末完成したが、この年の台風に大害を受ける。しかしながら現在は復旧して元氣旺盛である。なお弘岡下でも山下松実氏を理事長に、約四十ヘクタールの構造改善事業が、工費一・二億円で昭和四十二年（一九六七）にかけて行なわれ、耕地の嵩上げと区画整理が成功し、ハウス園芸の好適地と化した。

また森山地区に、塩田忠実氏（一九三〇―）以下組合員八人で、敷地二・七ヘクタールに、工費約二・四億円、国の補助二分の一で同様の施設を現在設置中である。第二次構造改善事業といわれる。これらの事業は、新しい試みとして困難な前途を切り拓いて、明日の農村への期待に答えてももらいたいものである。

なお伝統のある弘岡梨―弘岡下中心―も、前述高知市針木に進出した小島源平氏のほか、弘岡下および、森山地区では、西瓜の功労者で、県より産業功労者として表彰された松本長身氏が、有名な新高梨に取り組んでいる。

その他の産業、芳原、諸木地区のい草と畳表製造も、戦後急速に復興したものの一つである。「高知新聞」昭和二十五年（一九五〇）八月六日の記事には、県下の代表的産地諸木村では、県下全生産の約二十パーセントを占め、動力織機がすでに明治期高橋只助（一八三一―一九九）によって紹介されていたという。また同紙昭和二十七年（一九五二）一月二十七日には、芳原村でもほとんど家毎に畳表を織っていると伝える。両村ともこの時点での復興はすばらしい。昭和二十九年（一九五四）には、吾南に約百ヘクタールのい草栽培地があり、反収四―五万円であった「高知新聞」。久保重一氏（一九〇二―）によれば、戦前、戦中、戦後と生き抜きたい草―畳表の運命の転機は、畳表の統制撤廃である。それによって昭和二十七、八年（一九五二―三）頃大暴落となり、ついに

さて沿岸漁業の衰微は戦後の重要な問題となった。「高知新聞」によれば、すでに昭和二十五年（一九五〇）より問題となる。以後ほとんど連年その不振が論ぜられる。政府が沿岸漁業振興法案を国会に提出したのは昭和三十五年（一九六〇）であった。経済成長と沿岸漁業とは両立しがたい関係のようである。各漁業協同組合の赤字も増大したが、構造改善が沿岸漁業にも推進され、昭和三十七年（一九六二）頃より機械バッチ網



西分農業協同組合

最後に、春野町が高知市の近郊を占める所から、商工業の移転経営するものが少なくない。新川、増井を中心に商工会が生まれて活動するほか、とくに国道五十六号線沿いには、旭食品株式会社等新しい商工業の立地が見られる。かつての海南繭糸の跡地に近く水を求めて、日本高度紙工業株式会社が高知市より移転したのは、昭和四十三年（一九六八）八月であった。ところでこれらの工場の春野地方へ移転には由来久しいものがある。日本セメント株式会社が、すでに昭和十四年（一九三九）弘岡上ノ村、中ノ村と協定して同村吉良ガ峯の石灰に注目、戦後昭和二十八年（一九五三）同協定を再確認する。「弘岡中ノ村村会議事録」によれば、村長森岡深太氏時代、一千万円の

設立された農業協同組合―農協は、かつての産業組合の現代版である。農民のための組合として、その後活動を続けて現在にいたっているが、春野町に限らず県下各組合は昭和二十五年（一九五〇）頃から三十年（一九五五）頃にかけて経営に難渋して、その活動の中止が続出する。「高知新聞」にも、芳原、弘岡下の農協のそうした事情が伝えられている。いずれも昭和三十年（一九五五）代の好況で再建されたが、春野村（町）として合併後、村（町）内十農協（秋山だけは園芸農協）のいわば大合併が大きく取り上げられ、努力が重ねられたが現在にいたるもなお合併するにいたらない。学校統合とは、また違った歴史を綴っているようである。農協経営の合理化はたいていせつであるが、農家経済に直結する農協を旧村単位にとは、たしかに便利な点もあり、小学校のすでに統合された後の、地域の団結の核としての農協に魅力を感じる人も多いであろう。こうした問題については、結論を急ぐことなく、論議を重ねて民主的合意を得べきものと考えられる。

一億円という。仁ノにバッチ網のないのは切り替えの時廃止したものであって、一般に現在漁業から他方面へと、たとえば久保幸男氏（一九二〇）のごとく養鰻業へ進出のほか、出稼ぎ等への転換が多いのは、日本経済の動向と一致するものである。最近に弘岡中出身吉永義典氏（一九四四）は、養鰻業用うなぎ運びポンプも発明した。戦争中ほとんど強制的に農会と産業組合が統合され、農会として主として増産のために活動したことについては、前述したが、戦後統合は終わり、改めて農業協同組合と農業委員会となる。昭和二十三年（一九四八）頃より



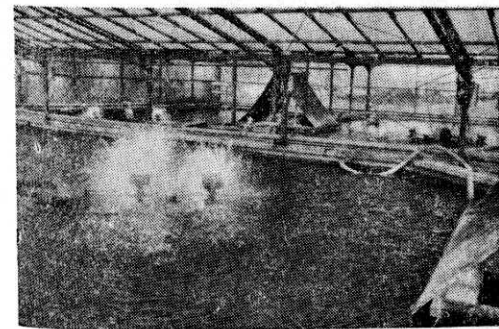
いりこ干し（甲殿）

なおバッチ操業は一月十五日から三月十四日まで休止、その間を地引き網十統が操業する。漁獲物はいわしで、いずれもちりめんいりに製造、そのため土居乙行（一九〇八）、山本元之（一九一八）両氏の製造場が甲殿にあり、二十人ほどの人が働いている。昭和四十九年（一九七四）の製産価格は約

各	浦	仁	ノ	戸	原	甲	殿	計
統	数	〇	八	八	八	一	六	

がさかんとする。ここで完全に地引き網は衰える。三浦漁業協同組合での調査によれば、現在の三浦のバッチ統数は左表である。

黒潮養鰻場（西諸木）



補償金で石灰山の稼行を認める。補償金は荒倉川の改修等に宛てるものである。問題となりかけた公害に対処しようとしたものと考えられる。昭和三十年（一九五五）採掘開始、グロリー式の大規模な採掘は、これに隣る山内鉱業所とともに、山形改まるものである。また西分峠付近にも、関西採石株式会社の西分作業所がある。山膚の無惨な露出は開発のすさまじさを語る。無惨な山膚といえば、荒倉トンネル入口東方の土取り場も同様である。公害に関係するのは、春野町森山間にある松本杉夫氏（一九〇八）の、松本公害防止工業株式会社が注目されている。強力冷風機を開発した氏は、現在湿式集塵機を生産する。また古ビニールの再生を目指し石川加代子氏（一九二九）は、弘岡中伊予川に日本樹脂化学株式会社を経営、廃物を電線用資材等に再生する。最近県も町内にビニール処理工場―高知県農業用廃プラスチック処理公社を建設した。

豊かな農村 戦後三十年の農村の変貌はまったく驚嘆に値するだろう。以下衣、食、住、医療等についてその変貌を見ることにする。家屋については新築、改築が目立ち、ことに草葺き屋根が一掃される。戦前はもとより戦争中、さらに戦後十年余も農村には草葺き屋根は多かった。「門田瑞穂日記」昭和十七年四月一日（一九四二）に、

家の屋根の裏側茅葺替、用石の人手で早い。

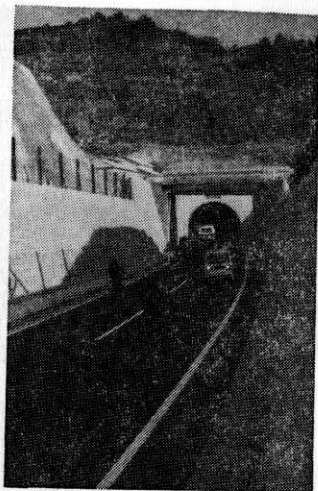
とあるが、家の屋根とは本宅―居宅のことである。門田氏のごとき富農でも当時草葺きであったものである。現存は瓦の色もとどりどりに、また鉄筋コンクリート、あるいは鉄骨ブロック建築さえも少なくない。内装もこれに準じて明るくなり、ことに台所と応接室は立派であって、冷蔵庫にはビール、ジュースの冷えたのが常時準備され、電気炊飯器、ガスコンロもまったく普及した。戦前まで「薪、飯米」として、燃料の準備は重視され、どの家でも燃料の確保に苦心した。「細川義昌日記」、「門田益穂日記」、「吉良家文書」にも薪の記事は多い。かつて近世洪水に命を落してまで流木を拾ったものも、多くは燃料―薪故であった。思えば変わったものである。LP

ガス、電気炊飯器、電気洗濯機が、農家婦人の労働を軽減したことは図り知ることができない。また燃料の豊かさは戸毎に風呂場を構えさせる。近所の貰い風呂も昔語りになった。「門田益穂日記」には、友人門田出治の所に風呂に行った記事が多いが、もうそのようなことは絶えてなくなった。

食事も豊かになったばかりでなく、たとえば従来お客―宴会といえ、めいめいの家で、手伝いの人の手による料理がご馳走の原則であったが、これも十年ほど以前から注文の皿鉢に変わった。自動車で皿鉢の肴は持ち込まれる。まったく変わったものである。変わったといえ、以前の農村のお客には子供が大勢であった。今は子供も青年の数もめっきり減る。ここにもやはり婦人の労働の軽減はあるが、他方後継者の問題には頭を痛める。

衣服は髪形とともにほとんど完全に洋装化され、晴衣の着物は女子に限られ、それも成人式のほかには、知人の婚礼式ぐらいのものである。⁽¹²⁾ 婚礼式といえ、昭和三十年（一九五五）ごろまで、奨励された生活合理化の一端としての公民館結婚式も、経済成長のなかで急速にすたれ、多くは高知市内の結婚式場へと会場はうつっていく。これは自動車の普及の関係もあり、また兼業農家というか、仕事場を高知市に持つ春野町の性格とも関係がある。自動車といえ、各家に乗用車と軽トラックをそれぞれ備え、その運転は労働にもあるいはレジャーにも便利である。車庫は昔の厩、あるいは堆肥場に代って重要な建物となる。

レジャーと云えば、農協主催の県内外の旅行は多く、それぞれの農協単位ではほとんど年中行事として計画される。数日の旅行は日頃の労働を慰めるものであり、ましてそのほとんど一生をただ働きに働いた人にとっては、報いられた老後と云えるものであろう。まったくこうあげて見れば、専業農家はもとより、兼業農家も多少の差はあるとしても、戦前とは比べようもない豊かな生活のなかにあるといえそうである。ことに医療の進歩と社会保険制度によって、結核等の恐るべき伝染病は激減した。かわいさ盛りの子供を疫痢に奪われて悲嘆に沈む親



新荒倉トンネル南出口
(弘岡中)

ところがこうした終戦直後、荒倉隧道工事が開始されたことは注意される。高知市と吾南を隔てる荒倉峠高度約百メートルは、長い間人びとの自由な交通を妨害した。その妨害は交通が頻繁となるほど重荷となるものであった。ここにトンネルの声は、前述したようにすでに幾度かあげられたが、挫折に終わったのが実情であって、ついに人びとの希望は達せられなかった。「高知新聞」によれば、昭

道路整備と自動車の普及 何もかも貧窮し荒廃した戦中、戦後であったが、道路の荒廃もその一つであった。手入れのまったく行なわれない道路は、多雨の季節にはまったく泥濘の悪路と化した。そこにいち早くバスを運行するとき、いっそう道路事情は悪化する。ぶざまな木炭気化装置は、さながらに臍腑をさらけ出したようになって、凹凸激しい悪路をのた打ちまわる。泥水は飛び散りえぐられた路面は、ふなでもおりそうに深い。道路の改修など抜本的なことには、まだ手のとどかない時であったといえるだろう。

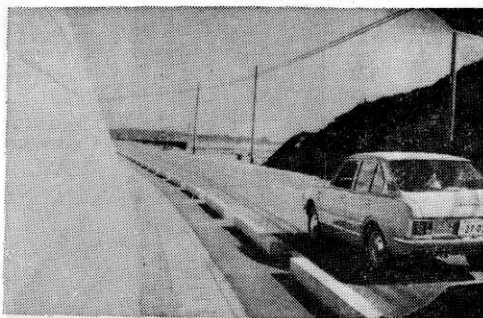
自動車交通と電話自動交換

純農家と農主兼業を合計すれば千百六十一世帯となる。これは町内全世帯数の約三十パーセントである。世帯数だけからいえば、給料生活者中心であるが、生産高からは別の数字が出ると思われる。それにしても、農業立町にも困難な問題があるようである。

純農家	兼業農家	商業	工業	給料生活者 (推定)	総世帯数
	農主				
七二六	四四五	八一〇	一三七	五九	一、八三一
					三、九八〇

も、また結核に、主人や子供を奪われて生活の壊滅するものもほとんどなくなった。ありがたい世としなくてはならないであろう。

戦後の農村―農家はたしかに面目を一新した。しかしながら問題がないとはいえないであろう。長時間の労働と農業の問題は健康と関係があり、ビニール、肥料等の資金の圧迫と市場価格の動揺等経営の問題もけっして少なるものではないが、何といっても最大の問題は後継者であり嫁の問題であり、また老人の問題である。結局は物質的豊かさの追及のなかで、どうやって人間の心の豊かさを保つかであろう。むつかしい問題であるが、ぜひ解決を要する問題である。また農家栄えて農業衰えると云われる。国全体の社会的分業として、農業―農家には食糧生産と、これに直結する自然保護の責務がある。もちろん現在は自由主義経済であり、営利の追及は基本条件ではある。しかしながら、社会の全体的な均衡―繁栄があつてこそ農村―農家のまた繁栄がある。相身互いである。これらの大きな問題は、もちろん政府の役割であり、いわば総合農政である。農村―農民が、安んじて社会的分業の責に任ずることができるよう環境作りが、なされなくてはならないであろう。しかしながら手を束ねて待つことなく、その意見を反映しなくてはならない。かつて地主層が、そしてまた自作農層が先頭に立って、時には自己を犠牲にして村のために戦った。こうした気構えは今もたいせつであろう。農村は今や前述二つの階層に分れ、地域的な団結は容易ではなくなったが、水と土とによって団結した過去の歴史は、なお現在、未来への道を示唆するものではなからうか。終わりに現在の町内の職業別世帯数の統計を示そう。



黒潮ライン(甲殿)

たうえに、部厚い舗装がなされて完全なものとなる。春野町では国道五十六号線と、いわゆる黒潮ラインの完成部に見るところである。したがって県道以下の多い春野町では、軽舗装が一般的で、大型ダンプの疾走にたとえば園芸高校東方で、改装間もなく舗装路面が破壊されたこともある。しかしながら現在、町内の道路―農道の一般的な舗装によって、まさに世は自家用車時代である。ところで国道五十六号線にもどって、ここで仁淀川大橋の架け換えについて語らねばならない。昭和四年(一九二九)仁淀川大橋が近代的なコンクリート橋になったことは前述したが、この近代橋も、自動車時代を迎えてその要請に応じられないものとなった。まず橋中がせまい、「高知新聞」昭和二十七年(一九五二)八月一日によれば、中央で長さ二十メートル、巾一・三メートル

見なくなるのは戦後の姿である。

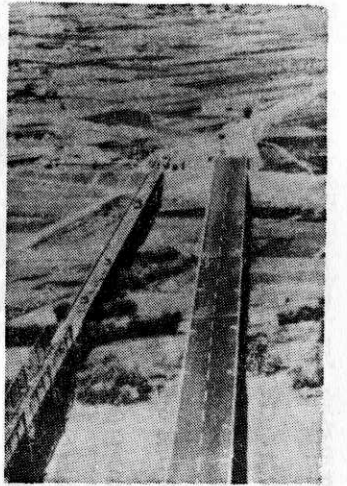
和二十二年(一九四七)九月十日、荒倉隧道期成同盟会は高岡町公会堂に開かれ、目的達成を呼びかけて氣勢をあげる。その後の経過については伝えられていないが、早くも翌昭和二十三年(一九四八)九月には、トンネル工事着工となる。以後約五カ年を要して昭和二十八年(一九五三)三月十三日、ついに隧道は貫通する。もちろん貫通即通行ではない。隧道内の整備が行なわれて、大型自動車をのぞいて通行許可となるのは翌昭和二十九年(一九五四)の秋からであった。結局六カ年である。主として終戦後の物不足の結果であるが、その成功には意義深いものがある。

かくて高知市鴨部―海老が橋―大曲り―荒倉峠―骨石―横手の公道は、その役割を終わり、峠の茶屋もその姿を消す。代って国鉄朝倉駅前から針木をへて荒倉隧道に連なり、トンネルの出口からは伊予川、高樋川、新川通と結んで現在の国道五十六号線は成立する。ところで荒倉隧道では、殺到する自動車に早くも行き違いは困難かつ危険となる。とくに自転車はほとんど無視される。かくて新荒倉トンネルは西側に併行して、昭和四十九年(一九七四)一月十六日開通する。三カ年をかけた工費約九億円の大工事であった。

前述荒倉隧道工事期間は、実に自動車交通発達の開始を告げる時期であった。「高知新聞」によれば、昭和二十六年(一九五二)バス路線の延長はあいっいで各公路に進められ、いわゆる土電、県交は路線の争奪戦を展開する。以後約十五年間が、バスの全盛時代とすることができよう。春野地方にも、高知を中心に高岡方面、仁ノ方面、横浜方面とバス路線は頻繁である。こうしたバスの全盛時代に、他方では自家用車の時代が幕を明けていた。同紙によれば、昭和二十九年(一九五四)小型自動車の売れ行き良好とある。いわゆるマイカーの時代はまだまだであるが、「門田瑞穂日記」昭和二十三年(一九四八)三月二十六日に、「荷車の金輪をタイヤと取り換える。タイヤ代二万七千円」とある荷車は、ようやくにして普語りとなってくる。あのように普及した荷車を

国が道路整備に積極的に乗り出したのは、昭和二十九年(一九五四)からで、ガソリン税の収入を道路整備の費用にあてるものであって、県でも翌年には道路整備が県政の重点となる。こうした上からの挺子入れは、昭和三十年(一九五五)代よりいよいよ強化され、道路事情は目に見えて改善される。まず舗装道路の出現である。すでに終戦直後の昭和二十年(一九四五)十月、占領軍は日本の道路の悪いのに閉口し、舗装の推進を求めている。

実際終戦当時、悪路に激しく動揺する占領軍のジープを見た記憶は、なお多くの人に残っているだろう。当初舗装もいわば軽舗装で、大型車には簡単に破壊される弱いものであったが、昭和三十七年(一九六二)頃より大型機械が導入され、一級国道よりまず完全な舗装道路が構築される。側面、路肩、側溝、路面と根本的に固められ



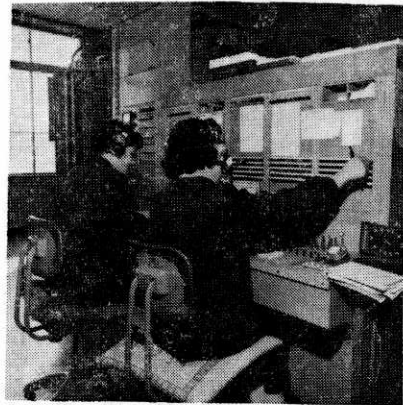
仁淀川大橋新旧（前方春野町）

三）十一月二十六日によれば、仁淀川大橋はついにラッシュに困り果て、一方交通の規制を行なう。かくて昭和四十年（一九六五）二月七億円（当初五・四億円計画）の巨費を投じて架換え完工、四月十七日開通となる。長さ六百三十三メートル、巾一一・五メートル、四国第一の長橋を誇るものである。荒倉トンネルに比べて、仁淀川大橋の春野町に与える利害関係は小のようであるが、大正十年（一九二一）はからずも渡船沈没で命を失ったのは、春野地方の人たちであった。交通路はつねに全体系として地域に関係を持つものである。その点昭和四十七年（一九七二）六月の町議会で、桑名町長は、いわゆる黒潮ラインの一環となる仁淀川河口大橋の架設促進を表明している。ここにも仁淀川大橋と同様の関係が見出されよう。橋は現在橋脚の工事中である。青天の洪水として、仁ノの人たちを苦しめた仁淀川河口に、二十年にもみたくない後になって、一大橋が現出しようとするのが思ったのである。世の中は変わるものである。

春野村民学校が自動車学級を置き、運転技術修得を推進、二十七人の合格者を出したことは「高知新聞」、昭和三十八年（一九六三）であったが、これは自動車時代に春野村（町）がはいったことを、はっきりと示すもので

ある。以後各農家には、軽トラックと乗用車各一台を備えるのは一般的となり、高知市等遠方に仕事を持つ者も、それぞれ自家用車を持つ。町内にはまた一般乗客の便利を図るタクシィ会社二、トラック運送会社数社と、多彩であるが、自動車時代はけっして万事めでたしではない。すでに昭和三十三年（一九五八）には歩行車保護が叫ばれ、自動車は走る兇器と悪まれ、また輪禍と怖れられる。とくに老人、子供は自動車に対して弱い。春野村で交通安全村民会議が持たれ、村内各層の有識者により村民の交通安全が討議されたのは、昭和四十二年（一九六七）九月であった。その結果か、同月中旬春野西小学校では、上田佳吉（一九〇八一―一九六八）教育長も出席して、子供の安全教育が熱心に行なわれる。ついに県下に先がけて国道五十六号線弘岡上の川窪踏切りに、横断歩道橋が完成する。実に同年十月のことであった。学校統合の条件でもあったが、国道を疾駆する自動車から子供を守るためには、是非とも必要な施設であった。また事故多発の弘岡中高樋川に、安全塔が昭和四十三年（一九六八）八月設置される。

なお春野町は田園都市である。幸いに自動車排ガスの問題はないようであるが、これに関心を払うことは必要であろう。ラッシュ時には、国道五十六号線は延々と続く自動車でさながら麻痺状態になるからである。ここで、昭和四十五年（一九七〇）より計画を進められた大規模農道について語らねばならない。内容、芳原、西分、弘岡下、諸木を結び町内東部に成立する新道路網は、さらに北方鷲尾山下にトンネルを抜いて、高知市に結ぶ大計画であって、町東部のいわば交通上からの嵩上げであって、昭和四十六年（一九七一）度より着工となる。用地買収その他に難航し、現在もまだ竣工にいたってない。高度経済成長が安定成長への切り換えもあり、完工の予想も困難ではあるが、荒倉トンネルのようなトンネルは、この地方にも必要と思われる。とくに内容の人びとの期待は大きく、楠瀬弥一氏（一九〇二―）はこれを熱心に推進する。その述懐に「有三大声一用地交渉纏 懸命報



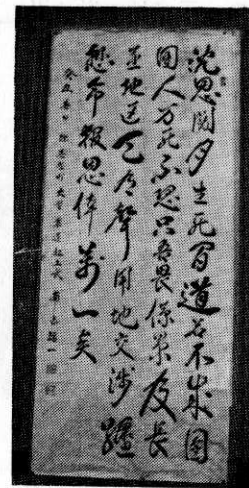
春野町有線放送室（春野町役場）

和四十五年（一九七〇）五月二十一日公社電話自動化の後も、しばらくは有線系電話と接続していたが、人員の都合上昭和五十年（一九七五）三月までで廃止となった。電話は便利である。いまや電話加入者は二千六百に達する。大正期村役場に電話架設の進められた時、誰がこの発達を想像しえたのであろうか。なお春野町の電話は高知グループに属しているが、高知報話局直属と春野局直属と二本建になっている。地域的区分では、諸木、芳原地区が高知直属である。甲殿地区が両属と分れているのも興味のある所である。

さて戦後茶の間を賑わわすテレビは昭和二十八年（一九五三）二月

たく当然であると思われる。なお有線放送については、昭和四十二年（一九六七）八月四日の「高知新聞」にも、学校便りの番組を編成して学校放送への寄与を図っている^{a4}とある。

ところで電話事業は日本では公社経営—電々公社が主体である。町村電話として有線放送とタイアップするのは、いわば一般的な電話普及の準備と解せられよう。すでに加入者も全戸数の三分の二となり、ついに町内電話は、昭和四十一年（一九六六）から、翌年にかけて工費六千四百万円で自動化したが、市外電話は電々公社の春野局に移される。昭和三十年（一九五五）代より国は電話の拡張と自動化に乗り出し、同三十五年（一九六〇）六月には、春野村の従来からの電話は土佐局を通じて、まず高知、つづいて同年八月には土佐市方面とも即時通話可能となり、土佐報話局内には、春野局が設置される。したがって町内の多くの家庭には、有線系と公社系の両電話が仲よくなお共存し、相互に便利に使われるとともに、有線放送の果たした歴史的役割を語っている。なお昭和四十五年（一九七〇）五月二十一日公社電話自動化の後も、しばらくは有線系電話と接続していたが、人員の都合上昭和五十年（一九七五）三月までで廃止となった。電話は便利である。いまや電話加入者は二千六百に達する。大正期村役場に電話架設の進められた時、誰がこの発達を想像しえたのであろうか。なお春野町の電話は高知グループに属しているが、高知報話局直属と春野局直属と二本建になっている。地域的区分では、諸木、芳原地区が高知直属である。甲殿地区が両属と分れているのも興味のある所である。



楠瀬弥一氏作詩
（同氏蔵）

恩倖萬一矣」とあるのは、関係者の苦心と喜びを語るものである。

通信 戦後の通信発達は、電話の普及と自動化、また通信とはすこしく違うとしてもテレビの普及、さらに春野町の特殊なるものとして、有線放送の事業をあげることができ

る。すでに戦前村役場等重要な機関には電話が架設されたが、電話の普及と自動化とくにダイヤル即時通話は、昭和三十年（一九五五）代からであって、まさに一般には経済成長であり、また交通からいえば、自動車とくにマイカー時代に照応するものである。したがって春野地方の特殊事情として、合併による春野村成立を機に、合併条件として春野村有線放送の開始が、ここで重要な役割を果すことになる。高岡郡佐川町について県下二番目として、旧西分村役場に春野村有線放送が開局となったのは、昭和三十三年（一九五七）九月のことであった。機械装置は県の中古品を五万円で購入したというのである。「高知新聞」。なお万事に乏しい戦後であったことがわかる。

春野村（町）有線放送が、もっとも華かに活動したのは昭和三十年（一九五五）代の終わり、昭和四十年（一九六五）には農林大臣より表彰される。昭和三十八年（一九六三）一月三日の「高知新聞」によれば、前年の昭和三十七年（一九六二）四月には新庁舎に移転し、職員はいずれもベテラン揃いで、併設の電話の交換も巧みに行なわれ、有線放送アナウンス—コンクールには、入賞者五人も出るありさまであった。有線放送本来の任務であるいわゆる広報活動には、自主番組を編成し、行政、文化、農事、衛生とその放送内容は多彩であり豊富であった。併設の電話加入者も千九百戸に達し、したがって収支も良好で、計十四人が働いている。農林大臣賞もま

NHKが放映開始、その以前はラジオ一点張りであった。ラジオにはラジオの長所があり、いまでも愛好者は少なくない。忙しいビニールハウス内の労働に、ラジオの音楽はだいたいな慰めである。テレビ放映が高知県に開始されたのは、昭和三十三年（一九五八）十二月一日であって、「高知新聞」によれば、昭和三十八年（一九六三）すでに普及はすさまじく、香美郡南部地方では二・五戸に一台もあった。春野地方もこれと大同小異であろう。カラー受像機が普及するのは少しおくれるが、昭和四十年（一九六五）代を迎えて急速に広がっていく。いまやほとんどの黒白テレビを追放する情態である。労働の疲れをいやす娯楽番組、政治、経済、社会の問題に対する教養―啓蒙番組、子供のための番組と、人びとの生活にいまやなくてはならぬものである。

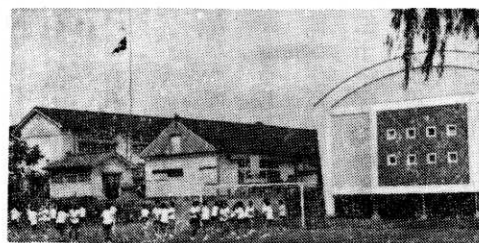
これは有線放送とも関係があるが、春野村（町）の広報活動に「広報はるの」がある。「創刊号」は実に昭和三十三年（一九五七）六月三十日発行、綿々と続いて現在にいたっている。村（町）施政を村（町）民に訴えて、理解と協力をえる重要な役割を果すものである。戦後民主化の線に沿うものといえよう。「創刊号」には、すでに歴史となった合併当時の村勢が示されて興味がある。中島村長は「新村総親和に依る強固な団結」を呼びかけ、また「安定した財政基盤の上に立つ」べきことを強調している。その後二十年、時の経過のなかで多くの問題は生じたが、団結と財政との重要さには変りはないであろう。なお「広報はるの」およびその担当者の粘り強い活動と、豊かな内容は世の注意を引き、昭和四十三年（一九六八）以来度々県、あるいは中央より島崎順氏ら表彰されたことはまだ記憶に新たなことである。

教育の復興と発展―同和教育

学校教育の復興 耕地や用水路、堤防の荒廃したように、戦争中の学校の荒廃も激しいものであった。食糧増産の勤労奉仕と、飛来する米機によって、戦争末期、ほとんど教育の仕事は放棄されたも同様であった。戦争は終わった。教育も戦禍から復興しなくてはならない。都会とちがって、春野地方のような農村では、食料の点など、復興にはよい条件があったとは云えようが、けっして尋常の努力ではなかつたはずである。

尽忠報国―滅私奉公一本槍で教育に当った多くの教師は、さて戦後の教育の理念を何に求めるか、まったく茫然自失の体であった。さいわい大正デモクラシーの自由教育は、なお多くの教師の頭にあり、これが戦後教育への橋渡しの役割を果す。他方占領軍の日本民主化―占領政策は堰を切ったように行なわれ、教育者についても、まず軍国主義を指導したものは教壇を追放されることになる。そのため昭和二十一年（一九四六）五月には、教員の適格審査が行なわれる。戦時中の行動について改めて責任が問われたが、もちろんほとんどの教員について、その責任を追及することは酷である。一般にあの事態で国の方針に従う以外に道はなかつたはずである。したがっていづれも適格と判定されたが、判定されるまではたがい不安の日を送ったものである。

そうしたなかで戦後のインフレは激化する。生活と敗戦に絶望して職を放れる同僚も多数出たが、残ったものは、生活防衛と新教育の実践、職場の民主化を求めて教員組合を結成する。高知県教員組合の結成は、実に昭和二十一年（一九四六）五月のことであった。一方アメリカ使節団の勧告に基づき、義務教育の延長と教育の地方委譲が決定され、翌昭和二十二年（一九四七）三月末には教育基本法、学校教育法が公布され、同年四月には六・三制―新制中学校が発足する。ほとんど焦土に近い国土に、新制中学校の発足したことは、多くの困難な問題を



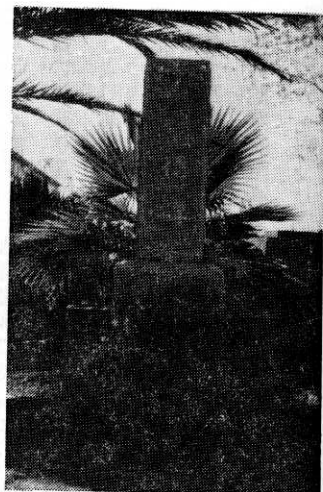
弘岡中学校

生じたが、それに耐えてこの制度の定着したことは周知である。明治維新後の学制実施と対比されよう。また青年学校は戦後ほとんど完全にその機能を喪失していた。タイムリーな切り替えと考えられよう。春野地方には弘岡中学と諸木中学が発足する。またこの時、戦時中改名した国民学校は、昔懐しい小学校へと立ち返る。

翌昭和二十三年（一九四八）四月には六・三・三制として新制高等学校が発足する。すでに前年九月には、由来教育に熱心な春野地方の人びとは、事態を予見して、戦争最末期弘岡実科高等学校を、女子部として併合した弘岡農業学校の高校昇格運動を進めたが、目的は達せられて弘岡農業高校となる。同年諸木、三瀬、神谷に同校の分校―定時制が設置される。翌昭和二十四年（一九四九）九月の高知県高校再編成では、全日制として園芸課程と農村家庭科が置かれ、分校には被服科が置かれる。いま同

校庭には、戦争中の昭和十七年（一九四二）より同校に勤務、多難な時代を教壇を守って昭和二十六年（一九五二）死去した浜口正彦（一九一三―一九五二）の頌徳碑がある。その一節に「先生資性温純研究に精進し、校の内外の信望頗る厚く、殊に生徒の先生を慕ふこと慈父も雷ならざるものがあつた。其学花卉園芸（おんか）に、本校の花卉園芸を県下に有名ならしめた」と讃えている。なお後昭和三十年（一九五五）代、当時柑橘栽培培熟の高揚があり、校長小田春樹氏（一九〇六―）指導のもとに、村人の注意を山にも向けるため、荒倉山の村有地に実習地として広大な蜜柑園を造成したことも有名である。昭和四十六年（一九七二）高知園芸高校と改称する。

さて教育の地方委譲の線に従い、教育委員会法が制定公布されたのは、昭和二十三年（一九四八）七月末であつて、この年十月には県教育委員が公選される。その後昭和二十七年（一九五二）十月、市町村教育委員もまた



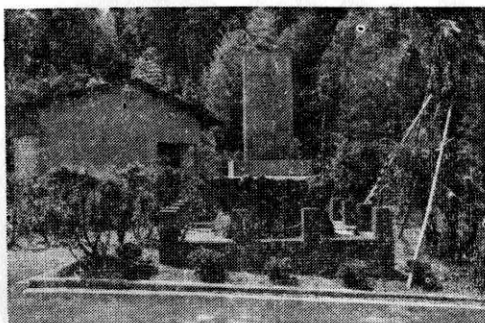
浜口正彦頌徳碑（弘岡園芸高校）

公選される。教育委員の選挙に、もっとも積極的であつたのは教員組合であつて、教員組合支持の教育委員が選出される。昭和三十一年（一九五六）教育委員が任命制となるまでの数年間は、また教員組合の全盛期であつて、教員の人事に研修にまた教育活動に強い力を発揮する。しかも戦後のいわゆる新教育については、早くも批判が生じつあつた。「高知新聞」昭和二十七年（一九五二）十二月十五日に、元小学校長が新教育における個人の尊重、芸術、および保健教育等を評価しながらも、道徳教育の欠陥を指摘、とくに教員―教組の政治活動を批判する。その後も道徳の低下と基礎学力の不足とは、新教育の問題点として指摘される。「安並家文書」には、昭和二十八年（一九五三）弘岡上ノ村教育委員会の「教育運営要項」がある。抄出すれば、

二、学校教育（要望）

- 一、教科内容の取扱い並びに指導、
- (イ) 社会科学内容の検討と取扱いの研究、
- (ロ) 基礎学力の査察と対策、
- (ハ) 県教委指導課と緊密連絡、
- (ニ) 自学と適正なる指導、
- 二、道徳教育の高揚、
- 三、教科書の県一本化、

四、自己学習乃至協同学習の設備と環境整理（継続計画）、

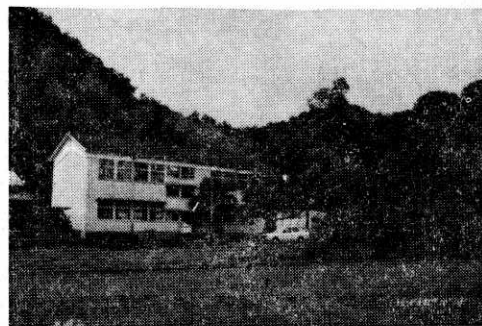


大黒武男氏頌徳碑（春野中学校）

任命制教育委員会発足前には、市町村教育委員会制には批判が多く、とくに教育長に人選難もあり。その廃止が、吾川郡町村長会でも論ぜられている。「高知新聞」昭和三十年五月。しかるに任命制教育委員会が発足し、学力テストあるいは動評実施等の諸問題で激しく教員組合と対立し、ついに政府の教育方針が確立する昭和三十五年（一九六〇）までの五カ年間に、地方教育委員会は完全にその基盤を固め、現在にいたっているものである。

えられている。大黒氏の活動とともに、またPTAの歴史を語るものである。なお同氏は青少年の不良化を憂えて、南学角力道場を開き、相撲を通じて青少年の非行防止のために働いている。

新教育が問題を孕んだとしても、そこには戦前夢想だもできなかった実り豊かなものを教育に加えたが、昭和二十七年（一九五二）四月二十八日、日本がサンフランシスコ条約によって独立を回復し、保守政権によって政治が長期運営されるとき、教育に関しては、新教育推進の中心となっていた教員組合との間に、激しい対立を生ずることとなる。まず教員組合は政治的偏向であるとして、昭和二十九年（一九五四）六月三日いわゆる教育二法が公布される。これによって、教員の政治活動は大きく制限を受ける。さらに翌々年の昭和三十一年（一九五六）六月二日には、新教育委員会法が成立し、教育委員は公選制をやめ任命制となる。高知県教育委員が任命となったのは同年八月であって、秋山出身で東京帝大付属農業教員養成所卒、一亀（一八九〇—一九七四）はその一人となり、以後激しく教員組合と対立する。

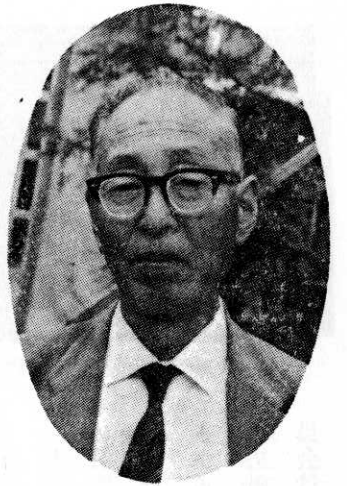


仁西小学校（西畑）

五、個性の調査と之が凝視の上に立つ教育に重点、以上はおそらく安並馬吉自身の教育意見であって、戦前の教育観と新教育とを、いかにして調和させるかに苦しんでいるとともに、また新教育に対する批判である。

さてこうした昭和二十年（一九四五）代は、新制中学の建設のほか、老朽化した小学校の再建も焦眉の急であった。懸案の秋山、甲殿両小学校は昭和二十五年（一九五〇）三月二十五日統合、また同年十月二十五日、仁ノ小学校と西畑小学校は合併して仁西小学校となる。翌年同校は放送施設を設置する。大正初期理科機械設置を求めて挫折した、山下長太郎校長も地下で万感去来したことであろう。昭和二十七年（一九五二）九月には、また諸木小学校改築

が始められる。翌年には弘岡中小学校も同様である。村当局は教育委員会の要請に懸念に答えたものであるが、この時重要な役割を教育復興に果たしたのが、いわゆるPTA—父母と教師の会である。戦前の父兄会—保護者会あるいは後援会とはその理念を異にし、民主教育を前進させることを合言葉にして、昭和二十三年（一九四八）ごろよりおおいに活動し、とくに、母親の教育に対する関心を高める。いま新建設の春野中学校の校庭には、大黒武男氏（一九〇六—）の頌徳碑がある。同氏は実に二十四年にわたって、春野村内小、中学校、吾川郡、高知県のPTA会長あるいはPTA連絡協議会長を勤め、「学校教育の堅実なる発展並びにPTAの拡充強化のために献身的な貢献をなし、かつ前人未踏ともいふべき偉大なる功績をうち立てられた」と感謝される。とくに弘岡中学校の「施設の充実或は環境の整美」と、また「高校学区制の変更について」地区住民の念願を実現したと讃



上田茂穂氏肖像

いわゆる勤評問題で高知県の教育界が沸騰したのは、昭和三十年（一九五五）十二月からであった。同月十三日の「高知新聞」には、全国教育委員長協議会の勤評実施の決定を伝え、これに対し同月十五日の同紙は、県の校長集会は勤評反対を表明する。以後強硬な県教育委員会に対し、教員組合はいわゆる一斉早退、休暇闘争等のストライキをもって対抗し、この間各市町村教育委員会と市町村単位の教員組合の支部あるいは分会との間に対立―衝突を展開したが、結局昭和三十五年（一九六〇）度の勤評提出九十七パーセント「高知新聞」でもって勤評闘争は終る。当時春野村は合併直後であった。教育委員長山脇茂（一八九二―一九七二）、教育長上田茂穂氏（一八九八―）が主としてこの問題に取り組む。「高知新聞」昭和三十三年（一九五八）四月十七日には、上田教育長の談話がある。それによれば、勤評は法律で定められたものであり、全国協議会でも実施を決定している。他の公務員も実施しているのとして、いわゆる教育行政のすじを通して、勤評そのものは簡単でよく、順位は付けずに提出するようにと含みがある。また同氏は道徳教育については、低学年は生活指導を、高学年は徳目主義を指すべきとし、さらに愛国心は必要であるとする。前述「安並家文書」の示す教育方針との一致が見られよう。春野村議会でも勤評問題は論議されたが、その空気は大体反対に反対というものであった。「高知新聞」。もちろん春野村にも勤評反対を支持する「民主教育を守る会」も昭和三十三年（一九五八）十月には活動しているが、勤評反対を戦った教員に、もっとも大きな影響を持ったのはTPAであった。昭和二十三年（一九四八）頃の結成以来、教員組合は力を入れてこれを育てたものである。しかしながら、この時点でPTA

の多くは教員組合の動きに反対の立場をとった。春野村の場合も「高知新聞」昭和三十三年（一九五八）九月十一日の伝えるところでは、春野村PTA連合会は、教員に授業放棄―ストライキは絶対にしないようにと求めるとともに、反面、教員の反対運動に対する父兄の激しい対抗にも慎重を呼びかける。穏当な処置であったと思われる。多くの犠牲者を出した所もあったが、春野村にそうしたことがなかったのは、結局は土地柄というべきであらうか。喜ぶべきことである。

勤評闘争が激しく戦われていた時、高知県では、公選制教委制のもとで確認されていた高校全員入学制が中止され、昭和三十三年（一九五七）ついに選抜制に切り替えられたが、この問題は勤評問題をいっそう激化させたのであって、同年九月六日の吾川郡伊野町での教育懇談会では、この問題で、県教委の担当者と吾川郡地区の中学、高等学校長とは激しく対立、中学校長は中学校教育を誤った方向へ導くと反対している。当時中学生は戦後のいわゆるベビー・ブームの結果急増し、弘岡中学校も昭和三十五年（一九六〇）生徒増に苦しんでいると「高知新聞」は伝えている。こうした生徒増が直接には高校選抜制となったものである。そうしたなかで、弘岡中学が同年四月一日県下中学選抜野球大会で土佐中学に1対0で惜敗する。その前の対香南中戦では弘岡中学は完全試合という記録を樹立する。かつて大正期の弘岡高等小学校の盛時を思わせるものである。勤評闘争のなかにも教育は健在であったと云えよう。なお秋山出身で物理学校卒業の川島源司氏（一八九一―）は、私立城東商業学校を戦後の変革で高知学園に改組し、小学、中学、高校、短大と県下最大を誇る私立の総合学園として発展させたが、これらは勤評闘争による県下教育の危機によって、かえって発展の足場を作ったものである。

しかしながらこの五カ年間の闘争によって、教育現場にはしばらくは相互不信のしこりが残った。とくに職制上教育委員会と教員との間に立って苦慮し、ついに多くの犠牲者を出した校長層が受けた衝撃は大であったが、

事態收拾への動きは昭和三十六年（一九六二）から急速に進められ、同年二月二十八日には吾川郡校長会が発足する。伊野町民館で会合し、以後の教育活動については相互の親睦と研修を進めることを話し合う。この年三月には、また吾川郡教育事務所と土長教育事務所は合併して、中央教育事務所となる。この年を境にして、教育委員会を中心に、また教員の研修とその職場での実践が新しい教育目標となってくる。以下春野町の場合の重点としてまず学校の統合同、同和教育の推進について記することにしよう。

学校統合同 学制公布以来約百年、その間の教育の発達はめざましく、日本の発展の条件となったが、春野地方においても、百年の足どりはすばらしく、すでにその都度縷々述べてきたものである。戦後とくに困難ななかでの教育の復興は貴重な歴史を綴ったが、時代の進運に伴う教育条件の整備は、他方いよいよ地方財政の負担を重くする。抜本的の施策には財政力の強化以外に道はない。吾南地方が大同団結して、従来の行き懸りにこだわることなく合併を決意したのは、この点にも大きな狙いがあった。また直接には、町村合併促進法によって、国より財政的援助も得られ、すぐれた施設を備えた学校の建設も可能となったからである。すでに教育費が地方財政を圧迫する問題は、一種の宿命のごときものであったが、教員の給料については、国庫半額、府県半額負担となり、その点大きく地方一市町村財政の負担を軽減したが、さらに蜀を望むのはまた人情である。

「高知新聞」によれば、昭和三十七年（一九六二）一月小学校統合同推進委員会が生まれ、十一月春野村では小学校を二校に統合同する方針を定め、教育長高橋静男氏（一九三二）を中心に進められる。まず委員会を設置したが、位置問題で難航、統合同についての了解はえられない。教育委員長宅間潔氏（一九〇一）さらに話し合いの努力が続けられ、ついに昭和三十九年（一九六四）にはいって位置問題にいちおうの結論がでる。東地区は平和中学付近、西地区は県道新川線と大小路線に挟まれた地域である。同紙には仁西地区の同意がまだ得られていないよ

うであって、九校一森山、西分、秋山、芳原、内谷、諸木、弘岡上、同中、同下一合併を伝えている。仁西小学校は戦後の昭和二十五年（一九五〇）苦心して新築合併した点もあり、また統合同に一番問題となる通学距離の点があつて、大正期秋山村では統合同に失敗、戦後ようやく統合同した苦い経験もある。春野町所蔵の史料によれば、以上の経過はさらにつきのように詳細である。まず昭和三十七年（一九六二）九月統合同委員会が統合同の基本方針は決定される。その後昭和三十九年（一九六四）三月、統合同委員会は最終的に統合同すべきであると教育委員会に答申する。この答申決定に先立ちすでに学校、PTAおよび各地域での座談会は持たれ、基本的な賛成が得られていたものである。ただし前述のように、仁西地区は五―六キロメートルの通学距離のために同年六月二十六日、議会は仁西を除いて統合同と決定する。ところが十月七日にいたって、仁西地区の統合同も決定する。そのためバス通学に補助が出されることになる。仁西地区の決断は、教育水準の向上は、規模が大きく設備の整った学校によって得られるという、大局的見地が理解されたからである。かつて大正十一年（一九二二）頃秋山、甲殿両小学校の統合同が難航不成功に終わったことを想起すれば、時代の進展とはいいながらその相違に驚かされよう。もっとも統合同を進めた村教委はすこぶる慎重であり、翌四十年（一九六五）九月には、仁ノ地区の二百四戸で希望調査を行なう。解答百八十三戸の内西校希望は百十戸東校希望六十九戸、西校へと決定したのはその月三十日のことであった。こうした配慮も良かったが、少数派が大同についていたことは、さらに賞讃されるべきであろう。かくて新校舎建築は後にまわして、まず名目統合同が行なれ、同年十月一日春野東小学校、つづいて翌年五月三十日春野西小学校となる。従来の各小学校はそれぞれの教場となり、校長は教場主任となる。したがって翌年の人事で、教場主任は改めて校長として転出する向きも生ずる。「高知新聞」昭和四十年（一九六五）十月四日によれば、西分教場主任の前島喜蔵氏（一九〇八）は、一日の全授業を一括して理科研究日とし、治国谷から鴨部へと



平和中学校

生物、地学の研修を実施している。いまや激しかった勤評の傷痕もいえ、教育実践への現場の空気は高まっている。こうした空気も統合に益したのであろう。同紙昭和四十一年（一九六〇）一月にも、仁西教場で岡村義広（一九〇八）教場主任が、楽焼中心に図工教育に努力し、ようやく問題となりつつあったテスト教育に、一服の清涼剤を与えると記されている。同様の空気である。⁽¹⁵⁾

「高知新聞」昭和四十一年（一九六〇）十一月一日によれば、名目統合は現場にあってまことに苦心のいるものであった。東小では内谷教場と芳原教場は相互に児童を交換して各単式授業としたほか、統合精神の高揚を中心に、各教場持廻りの職員会議、研究会あるいは各校巡回の連絡員等、その他時間的労力的なロスは大であった。

教育効果の向上のために新校舎落成は待たれたのであろう。かくて多くの人びとの期待を負うて、春野東小学校は昭和四十二年（一九六七）一月七日落成、工費約七千万円、鉄筋三階建の堂々たる近代建築、西小学校はこれにおかれて同年九月十一日落成となる。また同様の堂々たる近代施設である。たとえ地元が熱心とはいえ、町村合併に対する国の援助がなくては、同時二校の建設は不可能であろう。問題解決にはすべての人のそして組織の協力が必要である。なお児童数減少も統合の重要な契機であろう。

昭和二十二年（一九四七）四月出発の新制中学校によって、春野地方には東に諸木中学校、西に弘岡中学校が生まれ、その後は諸木中学校は平和村成立によって平和中学校となる。平和中学校が校長種田藤左衛門氏（一九〇八）指導のもとに作文、珠算に成果をあげ、とくに元気にマラソンに力走した記憶はまだ新しい。弘岡中学の野球に対比される。しかも両校ともに小学校同様に統合が進められる。小学校統合後七年の昭和四十七年（一九

七二）四月より、現校長三本好和氏によって春野中学校としてまず名目統合される。すでに問題は経験済みである。新校舎位置は町役場北方の台地と定められ、四月より敷地約四万四千平方メートルの造成開始、自衛隊高知駐屯部隊の手によって進められる。ついに鉄筋三階建二棟の本校舎中心に、壮大な教育施設が完成開校したのは、実に昭和四十九年（一九七四）四月一日であった。体育館等多くの付属施設もつきつきに完成する。さらに現代教育の高い要求から、精密優秀ないわゆる教育機器も購入される。新装の東、西小学校とともに、春野町の義務教育機関は完備したものである。とくに春野中学校に対する地域の期待は、高知市内の私立中学に遜色のない中学をと願ったものと思われる。今後はその内容の充実が大きく進められよう。この大事業の推進は町当局とくに教育委員長川沢美秋氏（一九〇四）、教育長橋本亨氏（一九一〇）中心に進められたのであって、町教育委員会の姿勢はまた、教育費、教育行政調査にも現われ、ついに昭和五十年（一九七五）三月文部大臣より表彰された。

同和教育 すでに岡崎精郎らいくたの先覚者によって、大正期より同和問題に多くの努力が払われたが、戦後の民主化とくに新教育において、人権の尊重―差別の撤廃は大きく前進する。また教員組合がこの方面に果たした役割は大きく、勤評反対の理由の一つにも、差別に連なるものとして採り上げられた。同和教育の推進は戦後教育の大きな成果といえよう。春野町の場合特記されるのは、昭和三十一年（一九五六）弘岡中学校の教員間に起った差別事件があった。県内ばかりでなく全国的にも問題となり、これをきっかけに全国的に同和教育の必要性は叫ばれ、全同研の出来るきっかけとなった。弘岡中学校はとくに熱心にこの問題に取り組んだのであって、かくて多くの人びとの苦心、努力によって同和教育が進められ、現在においては町教育の中心―根幹となっている。



「同和教育報告書」

をあげる。尊い実践の成果である。まず教師—教育はこのように「授業で勝負する」ことから出発するべきである。遠い道程の始めから終わりまでである。もっとも「授業で勝負する」とことは、教師だけの力によるというのではけつしてない。地域と父母の協力は第一にえられねばならないことである。同報告書はこの点について、春野町民に同問題という国民的課題解決への協力を求め、そのためには従来のこの問題に対する町民の

昭和四十六・七(一九七二)年度高知県教育委員会の、同教育研究指定校となった春野中学校では、「同和教育報告書」を編集し、その成果を発表している。それによれば、同校では昭和四十六年(一九七二)より同和教育を教育実践の柱としたが、なお「部落問題を直接、学級で指導するまでには至っていなかった」との反省に立ち、昭和四十七年(一九七二)度より、「本校教育の全領域の中で同和教育を正しく位置づけ、実践していくことを、目標」とする。そのため「全教師が、部落問題に対する認識と、同和教育に対する意識の変革、教師集団の意志の統一を勇気をもってしなければならぬ」と決意する。同和教育こそ教育の中心、教育そのものである。したがって

基本方針

部落問題を具体的内容とする、教科・道徳・特別活動の全領域によって、すべての生徒に差別に対する科学的認識を育て、すべての生徒が、部落を解放する確固たる展望を持ち、すべての生徒が、それぞれの進路の中で、その生活を、仲間とともに切り開いて行く力を持つように育てる。

まさに同和教育はすべての生徒の問題であり、そしてすべての生徒は平等と正義の仲間として協力しあうよう教育されるのである。以上の基本方針から

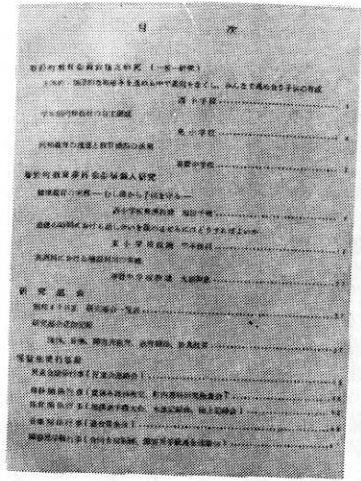
重点目標

- 一、教師の意識を高める、
- 二、生徒の部落問題に対する認識を育てる、
- 三、学力の向上をはかる、
- 四、集団指導の徹底を期する、
- 五、進路指導の充実を期する、

右のうち第三項の学力向上について、「差別のなかに生きて来た生徒たちは、また、教育差別のなかでも生きてきている。こうした生徒たちは、それぞれの能力を十分に伸ばしてない者が多い。私たちは、それらの生徒たちのなかにこそ可能性をみつけ、持っている能力を引きだし、一人一人を大切に、それぞれの生徒が、その能力を最大限に発揮でき一人の—いわゆる学力の上でも社会生活の上でも—落ちこぼれる生徒が無くなるように努力する」と決意している。これこそ教育の崇高な目標といわねばならないであろう。

同報告書は血の沁むような努力の実践記録に満たされているが、その末尾では二九年の歩みを総括して、「本校がねらい実践してきたことは、基本路線において、まちがっていないかった」との自信をもつ。その理由として

この報告の中の生徒作文の中にもあるように、部落差別に対し、生徒集団の意識が、徐々にあるが変ってきていることでもうかがわれるからである。部落差別はまちがいであったと知った生徒、もっと真剣に学習しようと集団に呼びかける生徒、父母のまちがった部落差別意識に抵抗しようとする生徒、学級の部落歴史の学習で、集団に働きかけようとする(中核となる)生徒、C子のような生徒、こうした生徒が、次々と生れてきていることである。



「春野町教育委員会指定研究」

- と配慮する。さらに
- 五、同和教育を効果的に推進するために、同和問題に深い認識をもち、実践力を身につけた熱意ある指導者の育成と資質の向上に努める。
 - どの道にも指導者―先達は必要であるが、困難な道にはとくに優れた指導者が求められる。またとくに同和教育の中心となる学校教育では、その推進のため従来の成果と反省の上に立って「人間社会のもつ不合理、偏見、差別を解消し、部落の真の解放」のため
 - 一、同和教育の研究、実践体制の充実を図る、
 - 二、部落解放をめざす教育内容の研究と授業の創造を図る、
 - 三、地区児童生徒の学力向上と進路の保障を図る、
 - 四、同和教育に関する教材及び資料の充実と活用を努める、

と具体的な努力を列挙する。

近世初頭おそらくは長宗我部―山内交代期後確立されて以来、長い間を忍苦の歴史に生きた同和地区に、真の解放が訪れるにはなお時間を要するかも知れないが、近世故意に部落を差別しようとした時代は別にして、近代後も表面的には差別しないとしながらも、なお隠微に差別は再生産されたが、今や行政はその全力をあげて、そして教育もまた全力をあげ取り組んでいる。問題解決は遠い将来ではないと思われる。

態度を、「常にいわゆる同和地区だけの問題として、周囲の町民は意識して目をそむけ差別を再生産し、偏見を強め、ますます差別意識を根強く持ち、しかも隠密にしていたのではないかとさえ思われてならない」と苦言を呈している。反省すべきであろう。

今や同和教育は、「昭和五十年春野町教育行政方針」のなかでも、中心として確立する。「南学発祥の地として、永い歴史的な伝統と教育尊重の気風」を踏まえた春野町の教育の目標は、「豊かな人間性と高い知性を備えた、心身ともに健康な町民の育成と、豊かな潤いある郷土づくり」とする。町が予算編成に、「福祉と教育」を重点としたことにも関係がある。町をあげての努力が教育に向けられている。そのため学校教育では教育条件の整備と、教職員の研修、実践が積極的に進められ、また父母および地域住民一体となって教育効果向上への道を歩む。とくに

国民的課題であり、教育行政の責任者としての同和教育については、町同教を積極的に助成し、その活動を中心に全町民のものとして、地域ぐるみで取り組むための体制を強化し、学校教育、社会教育の一体的な推進を図る。

「国民的課題」「全町民」「地域ぐるみ」に町教育委員会の同和教育に対する強い姿勢が見られる。

したがって同和教育は全教育の中心として位置付けられ、その「基本方針」には

- 一、憲法、教育基本法にのっとり、乳幼児教育、学校教育、社会教育、家庭教育の各分野において、人権尊重の精神を高め、民主的人間の育成を図る。
- 二、憲法、教育基本法にのっとり、乳幼児教育、学校教育、社会教育、家庭教育の各分野において、人権尊重の精神を高め、民主的人間の育成を図る。

三、同和地区の子どもの教育諸条件を整備し、その学力の向上と情操の陶冶をはかり、子どもたちのもつ可能性を最大限にのばすとともに、教育の機会均等と進路の保障につとめる。

社会教育 前掲昭和五十年（一九七五）度「春野町教育行政方針」には、社会教育について、つぎのように多くの目標を掲げている。

- 一、豊かな町づくりのための生産教育、
- 二、国民的課題である同和教育の振興、
- 三、社会体育活動の振興、
- 四、社会教育諸学級の振興、
- 五、文化推進の振興、
- 六、地域子ども会の育成、振興、
- 七、公民館活動の積極的推進、

このように広汎な面に、社会教育が関係するようになったのは、実に戦後それも最近のことである。教育が単に学校教育、青年教育に満足することなく、いわゆる生涯教育が叫ばれるにいたったからである。かつて社会教育のほとんど唯一のものであった青年教育―夜学会は、いまや新しい社会教育では、わずかに第四項の社会教育諸学級の振興のなかの「青年教育」となる。まったく歴史とはこのように変るものである。以下そうした変化の姿を追うことにする。

戦は終わった。町から戦場から外地からと青年たちは故郷に帰った。そしてそれまで故郷を守った人たちとともに、新しい村作りに参加する。思えば長い戦争の時代、理想を求める青年にとって、与えられた文化はあまりにも貧しいものであった。どんなに当時の青年たちは、文化を求めて止まなかったことであろうか。こうして戦後日本の目標であった文化国家の建設は、青年たちにも心より支持を受ける。大正期の青年が理想を掲げて邁進したように、昭和二十年（一九四五）代の青年も、理想を求めて先輩に続いたものである。春野地方にも旧村単位

に青年団は復活し、会長以下役員もすべて青年自身として民主化する。当時なお残る古い農村の姿は、いわゆる封建性として青年たちの批判の対象となる。また当時の青年の指導には、大正期の伝統を引いて、若い教師の参加するものも多く、両者相まって革新的な気風が青年層に渦巻いたものである。

こうした青年会の活動を代表するものが、青年高等学院である。「高知新聞」昭和二十七年（一九五二）四月十七日によれば、芳原村青年高等学院の終了式が行なわれ、十八名が終了証書を授けられる。またこの年県青年高等学院のモデル校に指定された同校では、翌昭和二十八年（一九五三）三月発表会を行なっている。この年五月には弘岡上ノ村にも青年高等学院が開かれ、小島祐馬博士が「二つの世界」について講演している。思うに青年高等学院とは、大正期のいわゆる補習教育とはその趣きを異にし、新しい時代らしくより高度の政治的、社会的、文化的知識の取得を目指したものであって、いわば講座風に、適当な人物に講演を依頼しこれを聴講したものである。この形は、その後のあらゆる社会教育のほとんどパターンをなすものである。

しかしながら青年高等学院運動の盛時は短かった。昭和三十年（一九五五）までであった。以後急速に衰えていく。その契機には多くのことがあげられるが、一つには革新的な教員が、勤評闘争のなかで青年指導から疎外されていったこと、青年自体も社会の繁栄のなかで、より娯楽的な方面に心を向けることになる。さらに根本的には農地改革後急速に農村が保守化することなどが考えられよう。昭和三十五年（一九六〇）にはテレビの普及もあり、青年団の集まりの悪いことが嘆かれ、これと重複をなして青少年の不良化が憂えられる。昭和三十五年（一九六〇）五月十三日の「高知新聞」には、春野村中央公民館で、村ぐるみで青少年の補導に当ることを申し合せている。文化に憧がれ理想を求めた姿とはまさに雲泥といえよう。

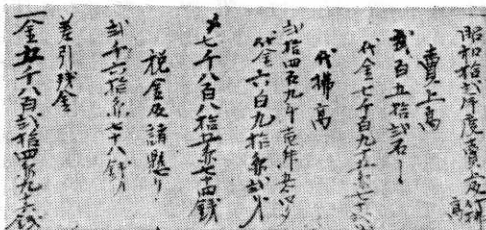
って、本来の意味の社会教育―生涯教育は展開する。もっともその以前から公民館は旧村別に設置され、その活動は漸次軌道に乗りつつあった。戦後占領軍の指導で設置を勧められた公民館は、大正期の公会堂―夜学堂の伝統の発展でもあるが、その活動は公会堂の比ではない。また同時に置かれた、前述農業相談所の活動の今日衰えたのとも相違し、現在にいたってほとんど社会教育の元締めである。占領軍の蒔いた種で、これほど日本に適応したものは他に少ないといえるようである。

すでに政府が公民館の設置を呼びかけたのは、実に終戦の翌二十一年（一九四六）七月であった。高知県でも昭和二十三年（一九四八）県の社会教育課は、県内各地で、社会教育振興のための指導者共励会を開いたが、二月十八日弘岡下ノ村でも吾南各村より参加共励する。この時各種の問題が研究されたが、公民館設置促進は重要な案件であった。「高知新聞」昭和二十七年（一九五二）二月二十九日によれば、仁西村公民館は、工費八十万円と青年の労力奉仕によって、二十二日落成したとある。青年団活動と公民館活動とが互いに協力調和した年代であった。翌二十八年（一九五三）十一月十日の「高知新聞」には、仁西公民館では、教養部主催の県政研究会が開かれ、勝賀野泰長県議、川村博将同を招いて、県政一般、農村の不況、仁淀分水関係について研究している。多くの成果があったと思われる。また翌昭和二十九年（一九五四）一月十四日「高知新聞」には、弘岡下ノ村の公民館活動を伝える。村内十カ所に分館を設け、各分館―部落で村政懇談会を開く。村役場、村教委、農協の役職員を招いて意見を聞いたのであって、当時は春野村へ統合の動きが活発な時であったので、この問題も大いに論議を呼んだのであろう。なおその一項に新生活運動があげられている。農業経営の一大転機であったので、生活の先行不安もあり、したがって合理的な生活は大きな問題であった。公民館活動が婦人学級を育成したのは、実にこの新生活運動からと考えられ、また戦後女性の地位向上とも関係がある。もっとも昭和二十七年

（一九五二）七月二十一日の、「高知新聞」の伝える公民館活動は、映画会、世論調査、卓球大会、芸能発表会、活花料理講習、農業講演会、読書会、村民運動会、農産物品評会、成人式、巡回村政説明会、衛生講座、農業地視察等はまだ多彩であって、それが合併後強力に推進されている、春野町中央公民館の事業へと、発展したものである。

合併後の公民館活動は、いよいよ活発かつ多彩である。たとえば昭和三十三年（一九五八）八月には婦人のための夏期講座、村連合青年団の共励会、翌三十四年（一九五九）一月十五日の成人式には、儀式につづいて会食、レクリエーションを楽しみ、記念には男子に印鑑、女子には鏡を贈る。前述社会教育より青年はしだいに遠のく面のあったのに対し、家庭婦人の参加は多くなり、春野村中央婦人学級の活動は、昭和三十八年（一九六三）二月より開始、同四十一年（一九六六）約四カ年で受講者は六百五十人に達し、十二会場の巡回講座と中央講座との連携にも注意が払われる。もっとも壮年男子対象に昭和四十年（一九六五）夏期大学も開かれている。片よったものではない。

春野村展（美術展）が開かれたのは、昭和四十年（一九六五）であったが、回を重ねて現在に至り、書道、絵画等を中心に村（町）民の出品者、参観者が多く町内の文化向上に大きな役割を果している。また村立図書館が設けられ第一回読書まつりが行なわれたのは、昭和四十一年（一九六六）十一月であったが、すでに村立図書館は昭和三十二年（一九五七）発足している。合併直後である。現在町立図書館は昭和四十八年（一九七三）三月末工費八千万円で新築の鉄筋二階建延一千平方メートルの公民館二階に開かれ、閲覧利用者も多い。なお青少年は町の前途を担うものである。青少年を社会教育の中に迎えるため、昭和四十三年（一九六八）から四Hクラブ主催村青年大会を開いたほか、また芸能等レクリエーションを中心に新しい夏祭りの趣向が繰り広げられ、また社会



地主若尾氏収支決算（広谷喜十郎氏所蔵文書）

体育の発達にも努力が加えられ、マラソン大会も行なわれる等、社会教育に関係する職員の努力は、中村忠館長、西内良夫館長から現在の山脇輝彦館長にいたっている。

春野町に文化財保護のための、文化財調査会が設置されたのは昭和三十六年（一九六二）四月であって、以後町文化財の指定、保護策、委員の研修等に努力し、町民の心の故里である文化財に対する町民の関心を高めている。現在指定されているものは、芳原観音堂、吉良城址、南学発祥地等別表の如く多いが、とくに昭和四十八年（一九七三）十月、翌年二月また同じ昭和四十九年（一九七四）八月と都合三回にわたって、県文化財専門委員岡本健児（一九三五―）、同広田典夫、町出身宅間一之「春野町の史跡と文化財」等編著、三氏の指導による、秋山山根、西分馬場末の両遺跡の発掘に、町の文化財関係者は委員長中山清城氏（一九〇五―）以下ほとんど総出で協力し、自ら鍬を振りスコップを握ったのであって、町の文化財に対する熱意が示されるが、この時春野中学校生徒の参加もあった。若い人が文化財に熱意を持つことは、何よりも喜ばしいことである。いま中央公民館の図書館前廊下には、整理された出土品が陳列されている。町の文化と生活の悠遠を伝え、心を清められるものである。なお最近の山根の発掘で、**五**千年前の縄文後期の土器が発見された。

註1、「宛口米取立簿」広谷喜十郎氏所蔵文書は、弘岡下ノ村の地主若尾氏の昭和十一年（一九三六）十一月の記録であるが、それによると若尾氏の小作料総額は二百九拾四石であって、内二百五十二石余を売却し、代金七千九百九十五円余をえている。ほかに代金払いが約七百円あり、合計七千八百八十五円七十四銭となる。このうち税金及び諸懸り（このなかには家計費も含まれている）が二千六十円七十八銭、差引五千八百二十四円九十六銭となる。若尾潤水（庄吾）が趣味に生きることができたのはこの収入である。この小作料を一反一石五斗平均とすれば、若尾氏は約二十町の地主となる。

る。高知県では大地主に属する。農地改革はこれらの田地をほとんど一挙に小作の手に与えたものである。なお昭和八十一年（一九三三―三五）まで毎年差引金額は三千五百円ほどであるが、昭和十一年（一九三六）には一挙に前述五千八百円余になる。おそらくインフレによる米価の値上りからであろうか。

2、合併第一号の吾川郡伊野町の場合も、多田吾川地方事務所長の尽力が大であった。行政指導というものである。3、横田百喜氏は、革新を標榜して出馬したが落選となる。春野町には一人の県議も現在ない。これは長い吾南の歴史でも少ないことである。

4、この地震記録の具体的なことは、安政地震（一八五四）を経験した秋山村郷士島村右馬丞（細川義昌父）、また同じ地震を幡多郡入田村（中村市）で経験した追放入山中多之助（前久礼田村庄屋）の記録と対比される。

5、万延元年（一八六〇）の「吉良宅快日記」にも、新川川に注ぐ弘岡下ノ村の江川の洪水について記している。内水も油断のできるものではない。

6、門田益穂は、大正期八田堰修理にはじめて採用された木工沈床の設計書に、驚嘆久しくしたという。現在の八田堰にどのような感想を漏すであろうか。

7、この収穫は小作料にも及ばない。農地改革が行なわれていなかったなれば大変である。

8、現在春野町内で牛、馬を飼育している家はほとんどなくなったが、なお西分川湖の長崎幸郎氏のごとく、伝統を守って飼育している人がある。すでに堆肥の必要は再認識され、おがくずの堆肥化に成功した人もある。牛か馬の飼育も多少は復活すべきではなからうか。

9、以後急速に被害が問題となってくる。

10、「地押」は一般に「じおし」であって、土佐藩では本田検地を地押と呼んだ。田地の面積を丈量するのではなく、荒地か生地か、水田か畑地か屋敷かの確認が目的であった。西畑の人が「じおさえ」と呼んだのは、自分の所有地を確認する点から、むしろ「じおし」よりも適当な呼び方の方である。

11、辻儀之助の嘉永二年（一八四九）の「洪水記」には、西分の人々が弘岡下ノ村で流木を拾ううち溺死している。こんな話しは伝えられていないとしても、少なくともなかったであろう。

12、公民館結婚式が一時人気を呼んだものの、急速に衰えたのは、教会結婚式のような伝統のないからであろうか。

13、排ガスの渦巻くなかに難行する自転車は、強いもの勝ちの現代の一面を示すものであろう。

14、庁舎屋上の有線放送室は、今は合理化されて無人作動となっているが、テーブルに番組は収められ、各家のテレフォン
11スピーカーに通じて自由に番組が聞かれる仕組みである。また放送室には夥たましい記念のカップ、楯が誇るべき歴史
を語っている。

15、平和中学校の池上正幸教諭の書くことによって生活を考える綴方指導、同西小学校長井上弥太郎氏の学習指導―学力
調査活用による―の研究等もある。また同校の綴方教育も評価されている。

結 語

―書き終えて―

恵まれた自然の条件―豊かな日光と水と広い低地―のなかに、われわれの先祖が住みついでから何千年を経た
ことであろう。秋山山根にいねの栽培が始まってからでも二千三百年である。その間に人びとの生活はたしかに
豊かに幸福になった。痘瘡の熱で暑苦しくても地面に寝てはならないと注意された人びとは、応接室の快適な安
楽椅子で、シャンドリアのもと読書、団欒を楽しむことができるようになった。思えば長い苦しい歴史ではあつ
たが、その間の進歩もすばらしいといえる。こうした進歩を支えたものは何か、もちろん天恵の条件のなかでの
人びとの努力である。人びとは神を敬い家族を愛し隣人と親しみ、時間を惜しんで働いた。働きに働いたことは
ほとんど働き過ぎるほどであった。これは今も続いている。

こうして働いてえた富は、しかしながら長い歴史の間に、しばしば貢納―税として上に吸い上げられた。ある
時は集落の族長に、そしてまたある時は国司や郡司、里長に、そして武士の世となれば地頭や領主たちに、近代
でも富国強兵のために政府にであった。年貢さえ納めるなれば、百姓ほど気楽なものはないと教えられ信じさせ
られてであった。

語 ももちろん下から吸い上げるだけが、上の者のやったことと思つてはならないであろう。古代には「セイ本」を
造り、中世には「ヒ」を造つて、その時代なりに生産への指導を忘れてはいない。ことに今から約三百年前の野
中兼山の弘岡井筋の建設は、春野地方にまったく新たな条件を創出したものであった。畑地は水田となり、水田